

# コンピュータとキリスト教

橋爪 大三郎

コンピュータの原理を考えたのはイギリス人かもしれないが、世界最初のコンピュータはアメリカで製造された。1号機はたしか、MITの博物館に陳列してあるはずだ。

MITは今世紀のはじめに、ハーバード大学の近所に引っ越してきたらしい。どちらもボストン市の北、チャールズ・リバーを挟んだ、マサチューセッツ州ケンブリッジにある。川向こうの隣り町とはいえ、事実上はボストンの一部である。

去年の秋からこの夏まで10ヶ月のあいだ、ボストンに滞在した。ハーバード大学・ライシャワー日本研究所の客員研究員として、講義に出たり、散歩をしたり、自由な時間を過ごした。発明から半世紀あまりを経て、コンピュータは生活の一部としてとけ込んでおり、ビジネスも日常生活もこれなしでは成り立たないようにみえた。

なぜアメリカが、世界に先がけてコンピュータを発明したのだろうか。それはもともと彼らが人一倍、情報を処理していたり、もっと情報を処理したいと思っていたりしたからではないかと思う。

ハーバード大学のまんなかにでんと位置するワイドナー図書館(中央図書館)の重厚なつくりをみると、知的生産の基礎となる、情報の収集に賭ける彼らの意気込みが伝わってくる。コンピュータの登場より10年あまり前に建てられたこの図書館は、いまや学内の100近い図書館を従え、すべての蔵書の書誌情報をデータベースに組み込んだ、ネットワーク(HOLLIS)を形成している。その詳細は、『季刊本とコンピュータ』12号(2000年春号)で紹介した。

ハーバード大学は、神学部からスタートしたという。アメリカに渡った人びとは、まず教会を建て、そこで説教をする牧師を神学部で養成してもらおうと考えた。キリスト教から、どのように情報の収集・

処理への熱情が生まれてくるのか、考えてみよう。

まず、『聖書』は短い。その気になれば読み通せる。ルター訳のドイツ語、カルヴァン訳のフランス語、キング・ジェームス版の英語など、定番を読みついできた歴史がある。第二に、キリスト教では、『聖書』以外のものを読む必要がない。これがユダヤ教なら、注釈のミシュナやベラホート、タルムードなど、イスラム教なら『コーラン』よりぶ厚いハディース(判例集)など、を読まなければならない。膨大で複雑なため、専門家でなければ手が出せない。ユダヤ教やイスラム教では聖典が法律を兼ねるため、こんなに詳しい注釈が必要になるのだ。それに対してキリスト教の『聖書』は法律でないから、ただ信仰のために繰り返して読めばよいことになっている。それはすべての信者にとって、望ましいとされる。

『聖書』は、読み通せるほど短い、あつあつはあそこに書いてあったと、すぐ思い出せるほど短くはない。そこで、テキストに細かく番号をふることにした。なにに書かれた何章の何節といえ、どの文かびたりとわかる。聖書は版元が違えばページ数もまちまちなので、これは便利である。

トム・ソーヤー少年の通っていた教会は、聖書の章句をひとつずつ子どもたちに暗唱させ、沢山おぼえた子どもを表彰した。熱心な子どもは五百や千は覚えたわけだから、子どもたちに印刷して配った章句の短冊は、何千とあつたに違いない。

これを踏まえて、『聖書』に関するさまざまな注釈書や資料集が、これでもかと山のように出版されているのが、キリスト教の特徴である。聖書の人名一覧。生母マリアとマグダラのマリア。イスカリオテのユダのほかにも、ユダは何人もいる。誰がなにに書の第何章何節に登場したかを、一覧表にして印刷する。そのほかに、聖書の地名一覧、用語一覧、……

ときがない。聖書のすべての文に番号がつけてあるから、こういう一覧が作成できる。

『聖書』のテキストそのものが、こうした作業をしないと読めない構造になっている。たとえば、福音書のイエスは、ふんだんに旧約聖書を引用して、あるいは旧約聖書を踏まえて、発言する。荒野での悪魔との問答も、「お前が神の子なら、飛び降りたらどうだ、『神が天使たちに命じると、お前の足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手でお前を支える』(詩篇91-11)とある」に対して、「『お前の神である主を試してはならない』(申命記6-16)とも書いてある」と、引用の応酬によるディベートである。『聖書』の各書は時を経て順番に成立していったものなので、あとから成立したものは、前に成立したテキストを参照したり、引用したり、ときに論駁したりする。こうしたこみいった論理関係を正確にたどることが、聖書を読むということなのだ。

『聖書』は、モーセやイザヤ、ダビデなど名前のわかっている人びとや、無名の人びとなど、大勢が著した共同著作物である。ムハンマドたった一人の靈感で成立した『コーラン』にくらべて、ぐんと複

雑である。一貫した論理を期待すべくもない『聖書』を、「神の言葉」と信じて読みつづける。どこまで読んでも、これで終わりということがない。

ルター派の多いドイツ人よりも、カトリックの多いフランス人よりも、国教会の力が強いイギリス人よりも、ピューリタンの多いアメリカ人が、いちばん熱心にこの作業に取り組んだ。聖書についての注釈(コメンタリー)も、番号をつけて順番に書架に配列する。探索に便利のように、カードを作る。それ以外の書類にもみな番号をうち、ファイリングして保存する。データベースを構築する。こんどは、どこにどういうデータベースがあるかというデータベースをつくる……。神の「隠された計画」をさぐるための、聖書の読解の技術が、いつのまにか世俗化されて、宇宙の「隠された秩序」をさぐる自然科学に姿を変え、現代社会で進行しつつあることの「隠された真相」をさぐる情報技術に姿を変えた。

膨大な量の情報を、反復をいとわずにとにかく処理してしまおうとするときに、コンピュータを欲する強い動機が生じる。アメリカがコンピュータとよく似合うと思うのは、私一人の考えすぎだろうか。

(大学院社会理工学研究科 教授 はしづめ・だいさぶろう)

おまけ

## 出版ニュース

◎ 幸福のつくりかた  
橋爪大三郎著

本書は、社会学者として日本と日本人が直面する教育や民主主義の危機に対して、わかりやすく、かつ積極的に発言する著者のここ数年の講演等を1冊にまとめたものである。

まず読んでみて感じることは、日本語を大切にしよう、という著者のメッセージが基調として濃厚にながれていることで、アメリカで暮らしたときの経験を語る序章では「言葉(日本語)と人間(日本人)の関係」を、築き直すこと、簡潔で分りやすい表現を、必要ならつくり：そうした言葉どおりにこの社会を運営すること」とい、終章「日本人はいま何をすればいいのか」では「政治家が、ジャーナリストが、科学者が、言葉でこういうふうを保証したら、それに責任をもって、そのとおりに行動する。これが基本だと思ふ」と語っている。これらは実に簡単なことだが、この本はそのことが「幸福のつくりかた」の第一歩だということを実感させてくれる。(B6判・290頁・1900円・ポット出版)

# 若者は不変。 「現代」を 反映しているだけ



橋爪大三郎  
東京工業大学教授

フリーターを、  
若者のやる気のなさの表れとみるのも、  
自由で気ままな身勝手とみるのも、一面的。  
時代の必然によって  
現れた過渡的な存在。

## マスコミが伝える イメージとは異なる

フリーターが、いつのまにか当たり前になった。  
「フリーター」の、明確な定義があるわけではない。①若くて未婚で、②あちこちの職を転々とし、③ひとつの職場に腰を落ち着ける気も、④将来の目標もない男女、といったところが平均的なイメージだろう。  
ほんとうにそうか。ある雑誌のフリーター特集の、インタヴューを読んでみた。いろいろな事情で

やむなくフリーターをしているという彼（女）らが、早く正社員の勤め先をみつけたと言いつつ、生活が苦しいと言いつつ、めいめいの夢を語る。マスメディアが伝えるお気楽でなげやりなイメージとはかなりの距離がある。実態も十人十色なのだ。

それを承知で大きくグループ分けすると、同じフリーターでも、親と同居か、それとも一人暮らしかで、まずだいたい状況が違う。親と同居の場合は、生活費もからない（食費や部屋代を親に支払わない）し、家事もやらない、優雅な「パラサイト・シングル」かもしれない。後者なら、ぎりぎりの収入で生活する「プロレタリア」かもしれない。  
次に、仕事への意欲や将来の目



はしづめ・だいさぶろう  
1948年、神奈川県生まれ。東京大学文学部社会学科卒業。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現代社会の動きを踏まえ、次代の展望を説く力量に定評がある。著書に「幸福のつくりかた」（ポット出版）、「橋爪大三郎の社会学講義<1・2>」（夏目書房）、「大問題!」（幻冬舎）などがある。

## 社会の調節に使われる 「トカゲの尻尾」

ポスト消費社会、九〇年代の経済はどうか。

人々の消費は伸びず、経済成長はストップした。一部のハイテク産業が活況を呈する一方、大部分の従来型の産業はコスト削減を強いられる。賃金コストを下げるには、中高年層をリストラし、正社員を派遣やパートで置き換え、アルバイトでおぎなう。どの企業も生き残りをかけて、トカゲの尻尾のようなフリーターを必要とするようになったのだ。

フリーターはトカゲの尻尾だから、こつちで切られ、あつちで切られ、動き回る。景気・不景気の波にともなう雇用調節にそなえるという意味合いに加え、好況・不況業種のあいだの移動や、季節間

（繁忙期、閑散期）の調節など、もつと不規則な雇用リスクを企業が切り抜けるための安全弁ともなっている。新しいタイプの「産業予備軍」だ。  
大学への進学率が、飽和状態となった。漫然と進学し、卒業しても、よい仕事にはありつけない。企業には、バブル時代に採用した社員がだぶついている。終身雇用を前提に、新卒の若者に仕事を教えて育てる余裕はない。3K職場やみばえの悪い職場は、実は人手不足なのだが、こちらは敬遠される。九〇年代の厳しい雇用情勢の中、ババ抜きのパバを押し付け合っているのが、企業とフリーターの関係なのかもしれない。

フリーターは、時代の必然によって現れた。しかしこれは、過渡的でもある。トカゲの本体が時代に適応できないでいることの、しわ寄せがフリーターなのだ。

フリーターを、若者のやる気のなさの表れとみるのも、自由で気ままな身勝手とみるのも、一面的であろう。若者は、ある意味で、昔もいまも変わらない。そして、その時代を敏感に反映するのである。

標。俳優やカメラマン、専門職をめぐるので、自由を大切にしたいから、時間の拘束や責任の少ないフリーターをわざわざ選んでいるという人々もいる。いつぼう、もつとまじな職がみつからないので、仕方なしにフリーターに甘んじている人々もいる。

働く側の動機や背景がそのようだと、企業にはどんな事情があるのだろうか？  
カール・マルクスの、「産業予備軍説」を思い出してみよう。

その昔、マルクスは言った。資本主義経済が発展し、どの工場でも機械がうなりをあげるようにな

るにつれ、伝統的な職人芸は解体し、単純労働に置き換えられていく。生産性があるので雇用はあまり増えないうえ、農村からも職を求める人々が都市に流れてきて、失業者が街にあふれる。いくらでも労働者の代わりがあるので、資本家は賃金を「生存水準」ぎりぎりまで切り詰めて、少しでも多くの利潤をあげようとする。失業者が、労働者の足を引っ張る「産業予備軍」になっているというのが、マルクスの産業予備軍説である。

十九世紀には説得力のあったマルクスの理論も、二十世紀になつて中産階級が増えてくると、現実

## 宗教は、科学者の羅針盤である

橋爪大三郎

科学とはなにか。

いざ定義しようとするとは簡単ではないが、誰もが認める特徴がある。いきなり世界をまるごと認識しようとするかわりに、特定の現象だけに注目し、実験や観察を通して知識を積み重ねていく。だから、物理や化学や……、最近では数えきれないほどの専門分野に分かれているのが、科学の特徴だ。科学は断片的な知識なのだ。

科学が始まるまでヨーロッパでは、世界の全体をまるごと掴まえようとしていた。それをきっぱりあきらめ、問題を限定したところから近代科学がスタートした。四百年まえのことだ。

それでは全体のほうは、どうなったのか。

さまざまな科学を全部合わせると、全体になるかという、そうはいかない。科学にはまだわからないことが沢山ある。いや、わからないことのほうが多い。穴だらけのパッチワークのようなもので、全部合わせても、世界の全体を覆うことはできないのである。

それでも人間は、世界の全体を知りたいと思う。全体を知らなければ、その一部分である自分のことも自分の人生の意味もわからないと考えるからだ。限られた人生を生きる人間の、当然の欲求である。科学が始まるまえ、世界の全体を説明するのは、宗教（キリスト教）の役目だった。そして実は、科学が生まれてからも、宗教は世界の全体を意味づける役目を果たし続けている。科学はたしかに、宗教と戦い、宗教と分離して発展した。しかし、それは要するに、科学と宗教とが車の両輪のように、人間の思考を支えるということだったのである。

明治の日本人は、科学を受け入れたが、宗教は受け入れなかった。富国強兵の役に立たなかったからである。キリスト教がよく理解できなかったせいもある。そしていちばんの理由は、天皇のカリスマ的権威にもとづく明治国家にとって、ヨーロッパの宗教は受け入れがたかったためである。

科学や技術は、日本を近代化するという国家目標

にとって、有用だった。それを担う科学者も、国家には有用だった。科学者や技術者は、政治家や官僚や軍人やそのほかさまざまな人びとと、国家という全体にまとまった。天皇を頂点とする明治国家は、神聖な全体で、科学者にとって宗教のようなものだった。

1945年の敗戦を境に、天皇を頂点とする神聖国家は、ただの世俗国家になった。人びとは、あたかも神に見捨てられたように、ぽっかりとした空虚を抱えることになった。科学の断片的な知識が、いったいどういう脈絡で、もっと大きな全体につながるのか、誰にもみえなくなった。その空虚を埋めるために、戦後しばらくは企業が代わって人びとの忠誠の対象になった。人びとは猛烈に働いた。企業が人びとを豊かにすると信じたからだ。だが、実際に豊かになってみると、人びとと企業のあいだにすきま風が吹きはじめた。人びとはもう一度、大きな空虚に直面している。

科学をすることの意味は、科学の外側から、科学を包み込む全体のなかで与えられるしかない。その全体は、宗教と限らないにしても、科学ではありえない。この単純な事実を、日本の科学教育は教えてこなかった。むしろ学校では、科学的であることは宗教的でないこと、科学的であることは哲学的でないことだと教えてきた。これは間違っている。人間は、科学的であるからこそ、科学を超える知識、科学を超える全体性を必要とする。

東工大は、理工系の大学なので、理学部や工学部に分かれ、さらにさまざまな専門に分かれている。それは当然として、科学を包む全体は、どこにあるのか。それは、専門のなかにも、専門をまたがる学際的な拡がりのなかにもない。それは、宗教のなかにある。宗教と言うのが言いすぎなら、科学とは違ったやり方で、自分の人生を考えてみる人びとの能力のなかにある。そうした能力が高い人ほど、科学する意味をいつも新たに掴みなおし、全精力を研究に傾注することができるのだろうと私は思う。

私がこの7、8年、学部向けに「宗教社会学」の講義を開いているのは、そうした理由による。科学者・技術者のタマゴたちが、そのことで、生涯を歩むための羅針盤を手にしてくれればいいというのが秘かな願いである。

(大学院社会理工学研究科価値システム専攻 教授)

特集 あなたが考える科学とは第2回

## 社会の科学は、どうあればよいのか

橋爪大三郎

はしづめ だいさぶろう

東京工業大学大学院社会理工学研究科(社会学)

科学がどういうものか、この雑誌『科学』の読者なら、誰でもわかっている。

科学は、物理学に典型的なように、「もの」の性質についての方法的な考察で、実験や観察にもとづき、その法則を解きあかそうとする。そうしたやり方で、客観的・論理的・仮説演繹的に知を構成しようとする、人間の態度も科学とよばれる。

社会についても、このような態度が可能なのか？

社会科学を、読んで字のごとく、「社会についての科学」と考えてみよう。

社会科学にとって、社会を「もの」として扱えるかどうかは鍵になる。

社会学者 E. デュルケームは、社会を「もの」と扱うことができるし、扱うべきだと主張した。彼は自殺についての統計を示し、一人ひとりが個別の事情で決断する自殺も、社会全体で集計してみれば、ある集合的な法則性に従うことを示した。

個々の行為にまつわる「主観性」の誤差を、大量現象のなかで相殺できる場合には、デュルケームの主張するとおりかもしれない。けれども、すべての社会現象について同様に期待することはで

きない。

社会は、観察する「もの」=対象である以上に、われわれが生きる当の出来事である。そのため、社会の科学には、二重の役割が負わされている。すなわち、

- (1)社会は、このような場合にはこのようになるはずだという、法則的知識
- (2)社会は、どのような場合にもこのようになるべきだという、規範的知識

のふたつである。

この区別は、カントの、存在/当為の区別とも関連している。

マックス・ヴェーバーは、この区別を踏まえて、学問の価値自由(Wertfreiheit)の原則を明確にした。社会科学も「科学」であるからには、社会についての価値中立的で客観的な、法則的知識をうみだすことが使命だとされた。そこで、マルクス主義のような、革命を担おうとするイデオロギーが「科学」であるかどうか論争にもなった。ヴェーバー以来の20世紀社会科学の常識に従えば、科学は(1)の法則的知識に自己限定すべきであり、いまさら(2)のように、規範的知識として

の役割をもちだすのは時代錯誤ではないのか、という議論も成り立つ。

私が思うに、(2)の役割が、今後も社会科学から消えてなくなることはない。20世紀の社会科学が、それなしで成立するようにみえたのは、それを裏側にかくしていたからにすぎない。

たとえば、20世紀の社会科学を代表する、経済学を例にあげてみよう。

経済学は、モデルを構築し、そのうえできれいな結論を導く。モデルの前提から結論までは、物理学とよく似た数学的な構成になっていて、価値中立的な法則科学のようにみえる。けれども、そのモデルとは何かとよくみれば、消費者の効用極大であり、企業の利潤極大である。欧米資本主義社会では、人びとは、消費者や企業はそうのように行動すべきだと思っている。そして、実際そのように行動する。ゆえに、モデルから結論がストレートに導けるのだが、その前提に価値(制度)がもぐり込んでいる。経済学の想定する人間像は「経済人(homo economicus)」である。それは、たしかに資本主義社会の人びとの客観的な実像になっているが、同時に、それが人びとをとらえる規範だからでもある。同じことは、政治学の想定する民主主義や自由意思、法学の想定する権利や法の支配についてもいえるのだ。

この事実を、文化の複数性と相対性を扱う、人類学がいちばんよく意識している。人類学は、ある社会の人びとが一樣に特定の価値観を抱いており、特定の人間像に自らをあてはめ、特定の行為規範に従って行動していることそれ自体を、説明すべき現象として発見する。当の社会に生きる人びとはむしろ、その事実を発見できない。彼らが、自分たちの社会について構成するのは、「原住民の知識」になってしまう。

M. フーコーは、人類学のような価値相対主義的な方法を、自らの社会に適用するとどんなにややこしいことになるかをよく自覚していた。認識(エピステーメ)は、その時代、その社会の与える理論負荷性(価値相対性)にまとわれている。たとえば、いびつな眼鏡である。直線が歪んでみえれば、眼鏡はいびつだとわかる。しかし、いびつな眼鏡をかけたままでどうやってその直線を

みつければいいのか。

社会は、さまざまな価値(大事なこと)や意味(そのわけ)に満ちている。それらなしに、人間は生きていけない。価値は、その社会に特有なもので、ほかの価値でもよかったという点では「主観的」なものだが、個々人に選択できないかたちで確かにそこに存在しているという点では「客観的」なものだ。

社会を、価値や意味にみちたものとしてあるがままに記述することが、社会科学がまずまっさきになすべきことであろう。価値や意味は、その社会の人びとにとっては、(2)規範的な知識であるからこそ、(1)法則的に妥当している。両者は切り離されないかたちで結合している。しかもこの事実を、自らの社会について記述する場合には、記述される意味や価値/記述する言語が、異文化を記述する場合のように分離してくれないという問題も加わる。フーコーの覚悟した困難である。

価値を客観的に記述するため、いったんは価値に内在する、法則的知識でありながら、その社会を生きるわれわれにとっての規範的知識にもなる。社会科学をきちんと実行しようとするれば、そうした重層的な知を構成する以外にない。それなら、経済学や政治学や法学のように、制度的な前提を隠した機械的(数理的)なモデルから出発すればよいとはいかない。

この点から、言語ゲーム(language game)が有望だと私は思っている。言語ゲームは、哲学者 L. ヴィトゲンシュタインが提案したアイデアである。それは、価値相対主義(どの言語ゲームにも、その外がある)と価値絶対主義(だれもがどれかの言語ゲームに内在している)とをともに含む、徹底した認識を示している。言語ゲームの複合としてまず、われわれの社会を考え、その内部に、特殊場合として、社会科学のさまざまな既存の分野(ディシプリン)をはめ込んでいくのが、社会の全貌についての科学的な認識を構成する近道ではないだろうか。

言語ゲームをモデルとする社会学が、21世紀の社会科学において、中心的な役割を果たすことになるかと予想しておこう。

# 私は「教育」からどう考える

ここに教育についての一つの意見を提示したい。  
きみはここから何を考えるか。自分の意見を引き出してみよう。

## 「考えの履歴書」

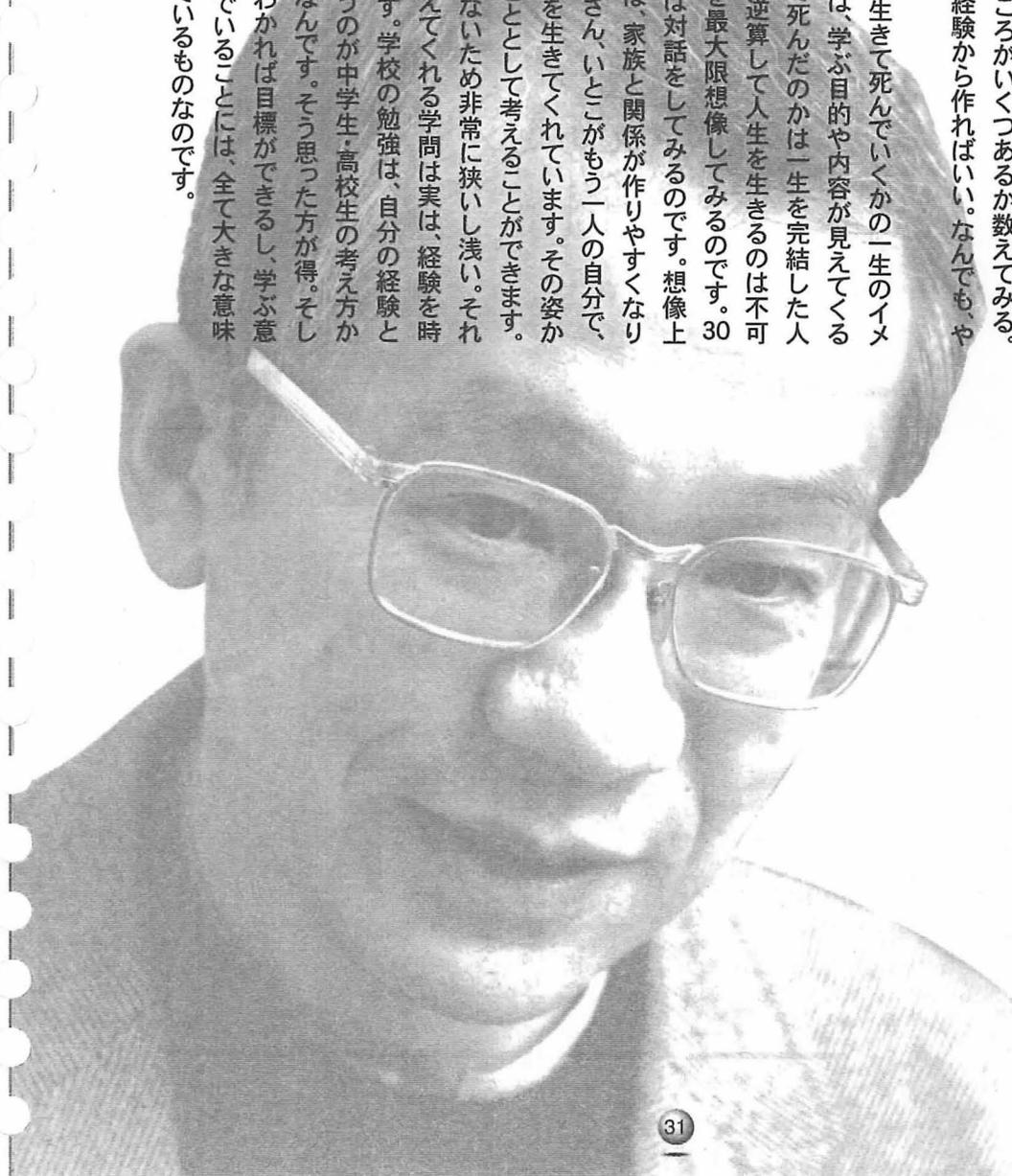
まず、なぜ勉強するかについてお話しします。  
勉強は時間とエネルギー、注意力、集中力を使って、情報を将来生きるために自分の体の中に変換しているんです。今は情報化時代で、情報は膨大に図書館やネットワークなどさまざまなところにありますが、本当に大切なのは自分の頭のなかにどれだけの情報があるか。自分の頭の中にないのなら情報のあるところへ取りにいかないといいませんが、それには時間がかかります。もともと頭の中に情報がある人にはかきませんね。だから、基本的なことを正確に、頭の中に入れて自分のものにしておくことが大切なのです。それが普通教育なんです。たとえば、「四面楚歌」を学校で習いますよ。分からなければ辞書を引けばいいというのでは意味がなくて、使い方や意味が自分の頭の中に入っていないではじめて意味があるのです。だから、高校までは誰もが頭の中に入れておかないものを学ぶのです。入れないと損をしますよ。入れても得はしないけれど、入れないと損をします。

入れて得をするのは自分だけの特別メニューです。みんなが勉強しないことを、自分で勉強しておけば得をします。それも大事。損をしないで得をすれば幸せになります。人と違うことによつてみんな得をしているのですから、世の中助け合いです。みんな違うことをやっていると社会が成り立っているんですよ。自分の得意を伸ばすのは競争ではありません。みんなが幸せになる方法論なんです。ただ今の教育は、それがなかなかうまくいかない。高校時代が終わり、それから先みんな違うことをやる段階になって逆に自分の方向を見失い、切り替えができないで困ることが多いのです。そうならないためには、普段から人と違うことにプライドを持つことが大切です。自分は友だちと違ったところがいくつあるか数えてみる。もしなければ、自分独自の勉強や経験から作ればいい。なんでも、やるうとする気持ちが大切です。

学ぶためには人間がどうやって生きていくかの一生のイメージが大切です。イメージがわけば、学ぶ目的や内容が見えてくるからです。でも、どうやって生きていくのかは一生を完結した人にしか語れませんから、結論から逆算して人生を生きるのには不可能です。だからこそ、自分の将来を最大限想像して見るのです。30歳になった私を想像して、できれば対話してみます。想像上の私と対話ができるようになれば、家族と関係が作りやすくなります。周囲にいるおじいさん、おばさん、いとこがもう一人の自分、自分に代わってもうひとつの人生を生きてくれています。その姿からいろいろな情報を得て、自分のこととして考えることができます。ただ経験は、経験した範囲でしかないため非常に狭いし浅い。それを補うのが学校教育で、学校で教えてくれる学問は実は、経験を時間的・空間的に広げてくれるのです。学校の勉強は、自分の経験とつながらないからつまらないというのが中学生・高校生の考えかたかもしれません。実は大分なかりなんです。そう思った方が得。そして早くわかった方が得です。早くわかれば目標ができるし、学ぶ意欲も生まれます。あなたが今学んでいることには、全て大きな意味があり、あなたの将来につながっているものなのです。

## 「考える人」の意見を聞く

テーマへの  
アプローチ  
実践  
添削課題



## はしづめだいさぶろう 橋爪大三郎

1948年神奈川県生まれ、東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学大学院社会学研究科価値システム専攻教授、『選択・責任・連帯の教育改革』完全版、『言語派社会学の原理』など、著書多数。最新刊として、『幸福のつくりかた』。教育問題から政治、経済、国際問題にいたるまで、さまざまな分野にわたる見解を発信している。

# 宗教がわかれば、世界がみえる

橋爪大三郎



日本人は、世界がわからない。それは、宗教がわからないからである。

明治維新もいけなかった。富国強兵、万邦対峙。西欧列強と張り合おうと、やたら背のびをした。科学技術や制度など、すぐ役に立つ実用知識はどんどん取り入れたが、それ以外は後回しにされた。キリスト教も、申し訳程度にしか入ってこなかった。結局、西欧文明の理解が歪で底の浅いものになった。

その前の江戸時代から、日本人は、宗教を馬鹿にする癖がっていた。幕府の行政指導が功を奏したのである。

島原の乱に懲りた幕府は、日本人全員に仏教を強制し、戸籍を寺に管理させた(宗門人別帳)。僧侶は、葬式しかやることなくなくなって墮落した。宗教の威信は地に墮ち、苦しいときに弱者がすがるもの、としか思われなくなった。

こんなことだから、日本の近代化は、よくわけのわからないものになった。

西欧近代社会は、キリスト教を中心に出来あがっている。民主主義も科学も資本主義も、キリスト教から派生した。どれも

宗教ではない、世俗の制度だが、もとはと言えば宗教がたちを変えたもの。そしていったん出来あがれば、宗教と切り離されても自己回転していく。そうやって宗教がいなくなった空家に、のこのこあがり込んだのが日本人だ。近代的な制度の扱いが自己流でちぐはぐになるのはやむをえない。

ついでに言えばマルクス主義も、宗教がすがたを変えたものである。唯物論(＝無神論)であるところがキリスト教と違うだけで、あとはそっくり。日本の知識人は一世紀あまりもマルクス主義にふり回されいながら、相手が宗教だとは気がつかなかった。

明治以降、日本が受け入れた近代は、宗教(キリスト教)という巨大な象の、鼻であり尻尾であり胴体であった。ばらばらなままで、ひとつのイメージを結ばない。インターネットで洪水のように情報が押し寄せても、混乱は増すばかりだ。

とは言え、日本人はまだ運がよかった。自分たちの宗教に誇りをもっていた人びとほど、近代化に苦勞している。

たとえば、イスラム圏の人びと。イスラム教徒は、神の定め

たイスラム法に従って日常生活を送るように決められている。いくら近代がよさそうに見えても、イスラム法を捨てて、キリスト教徒のつくった制度を取り入れることはできない。明治維新のように、まるごと西欧の制度を取り入れるのは、宗教に無関心な日本人だからできることなのである。

ロシアの人びとは、ロシア正教の原則に従っていた。中国の人びとは、儒教の原則に従っていた。だから近代化に手間取った。マルクス主義を、ロシア正教風に読み替えたマルクス・レーニン主義、儒教風に読み替えた毛沢東思想で、近代化をはかることになった。だから、キリスト教(プロテスタント)をベースにしたアメリカと、反りが合わない。

インドの人びとは、ヒンドゥー教を大事にして生きている。ラテン・アメリカの人びとはカトリックを、アフリカの人びとは伝統的な宗教を、大事にして生きている。……。この地球でどのような人びとがどんなにばらばらな価値観にもとづいて生きているのか、ありありとイメージできることが大切だ。

二一世紀は、グローバル化の時代である。いつのまにかグローバル・スタンダードができあがるので、それに合わせればいいやと、日本人はなんとなく思っている。そうではない。西欧もアメリカもだんだん世界の中心でなくなり、いろいろ違った宗教、違った発想にもとづく人びとが、ますます発言力をもつ時代がくる、ということである。

ゆえに、混乱は深まる。

そこでやはり、日本人は、宗教の入門書を読まなければならぬ。『世界がわかる宗教社会学入門』は、私が東工大で開いている講義をまとめたもの。一八〇〇円の定価ではおつりが来るぐらい、ありがたい本だ。二一世紀の青写真を描くには、この程度の知識が不可欠なのである。

(はしづめ・だいさぶろう 東京工業大学教授・社会学)

世界がわかる宗教社会学入門

橋爪大三郎著

1800円(税別)

# 医師は「患者の死」から目を背けず よりよい死をサポートする存在 「人間力」を養って敬意ある対応を



## 納得できる死に方こそ 患者の望むもの

医師となった以上、人間が死んでいくのを見てとる覚悟をしなければならぬ。

ところがこれが、難しい。人間は誰でも死ぬが、それは一回だけ。自分の死を初めてのこととして、おののき、苦しみ、うちのめされるようにして

迎えるのである。死ぬことのプロは  
いない。

そうやって苦しむ大勢の病人や患者を、医師は毎週のように見送ることになる。死ぬのは医師自身でないから、ひとごとである。しかし、臨終を迎える患者が、それと懸命に向き合っている事実をきちんとした態度をとれないようでは、それでも医師なのかと言われてもしょうがない。

昔の医師は偉かった。小学卒で奉

性疾患が増えた。これから高齢化がさらに進むと、病院は死にゆく老人たちの待合室みたいになるだろう。末期医療は、金がかかる。なるべく健康で長生きするのはよいとして、最後は人の迷惑にならず、納得できる死に方をしたい。これがいま、大方の人びとが医学に望むことではなからうか。

## 病院は死に場所ではない 治療の意味を改めて考えよ

いまの医学は、「人が死ぬ」という事実から、目を背けていると思う。治療を続けていけば、医師は患者の死を考えないで済む。それでも人は死ぬのであり、患者はそれから逃れられない。少しでも生きながらえさせる治療は、むだで迷惑なものではないのか。

オランダが先ごろ、安楽死法を通過させた。患者の自己決定の考え方を徹底すると、当然そこに行きつく。これに続く先進国が、増えるに違いない。

死を控えた高齢の患者にとって大事なものは、医師の専門的な能力よりも「人間力」である。治療が下手く

そで、患者に苦痛を与えるようでは、むろん失格である。しかし、専門的な能力も、治療のための治療ではだめで、一つひとつの処方患者にどのように届いていくかという想像力、それが患者の世界にどういう意味があるかと考える理解力と結びつかなければ意味がない。

死を迎えている点で、患者は、医師よりも先輩である。このことに対する敬意がなければ、「人間力」は育たない。

死ぬということは、「健康と生命が大事、治療は意味がある」としてきた社会常識の意味世界が、患者にとって崩壊してしまうことである。死ぬことがはつきりしたら、治療はその意味を変え、よりよい死をサポートするものにならなければならぬ。さまざまな疾病ごとに、苦痛のあり方や意識の推移の事例を、なるべく詳しく収集する。それがペイン・クリニックや、生命の質を維持するための治療の基礎になる。

そしてなにより、医師が頭を切り換えること。さらに、医療制度も組み換える必要がある。いまは、治療しないで数カ月すると、退院(転院)

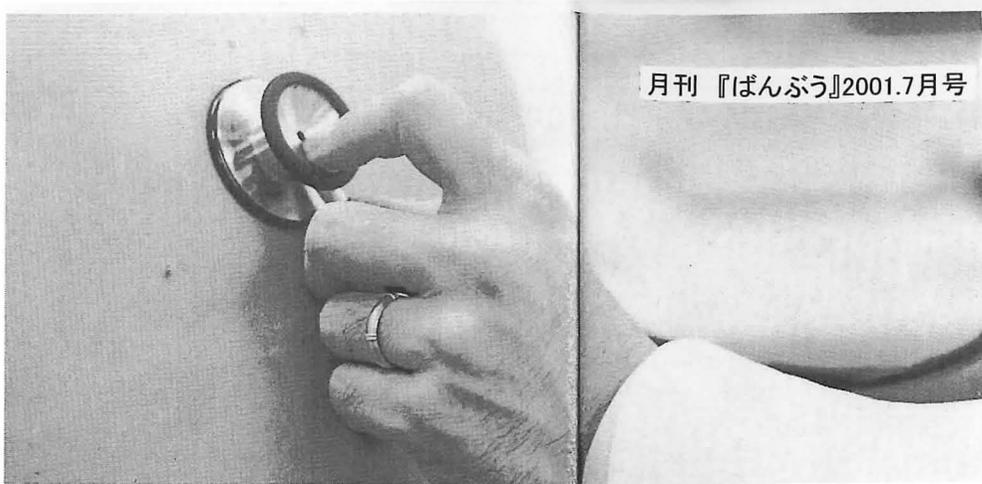
しなければならぬ。よく考えてみれば、病院は死ぬための場所ではないのである。しかし現に、多くの人びとは病院で死ぬわけだし、ほかに死ぬための場所があるわけではない(ホスピスなどがあるが、十分に多くはない)。

いまの医学は、多くの人びとが不本意な死に方をしてきた時代の産物だ。大部分の人びとが寿命をまっとうするようになった現在、医師は、「人間力」を武器に、患者に立ち向かわなければならぬ。相手は「老人力」をもっているから、あなどれない。医師が死から目を背け、治療の意味を考えることができないから、患者はなぜ、このような形で病院において死を迎えなければならぬのか納得できず、絶望する。

よい死に方は、患者本人にとって価値がある。それならば、医学にとっても、医師にとっても、価値があるとすべきだ。専門家であるよりも、組織の一員であるよりも先に、一人の人間としてこの価値を受けとめる。それには、哲学も、宗教も、医師個人の信念・価値観も必要になる。今こそ医師は、「人間力」を磨いて命がけでことに当たるしかない。

### ●はしづめ・だいさぶろう

1948年、神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。95年から、東京工業大学大学院・社会理工学研究科価値システム専攻教授(社会学)。著書に『ヴォーゲル、日本とアジアを語る』(平凡社新書)、『世界がわかる宗教社会学入門』(筑摩書房)など。



2001-2-8

教育改革 識者の提言



橋爪大三郎  
1948年生まれ。東京大学、専  
同大学院博士課程修了。専門は社会学

負担の明確化と専門性が重要に  
大学の入学試験は、効率的でなく、必要でもない。準備期間を数年おき、別のシステムに移行すべきだ。大学入試はなくなると、多くの人が信じてきた。それは根拠がなく、事実にも反している。戦前の大学は、学部によるが、だいたい無試験で入学できた。アメリカの大学には、今も入学試験などない。大学入試は戦後の産物であり、何の工夫もないまま現在まで続いてきたのだ。

戦後の日本社会は、なぜ大学入試を必要としたか。第一に、大学進学率がどんどん上昇したから。大学も次々につくられたが、志望者の方が入学定員より多  
か。そこでどの大学も、入試で選抜すればいいと  
考えた。  
第二に、入試の難しさが大学の評価を決め、就職の  
パスポートとなったから。日本の大学は、現実とかけ  
離れた教育をし、実際のでない。そこで社会（とりわ  
け企業）はまるで大学を信用せず、代わりに入試成績  
（偏差値）を採用の目安とするようになった。  
第三に、入試の難しい大学に入れば、大企業に就職  
でき生活も安定すると親も子どもも考え、入試が自己  
目的化したから。受験のための塾や予備校が繁盛し、  
教育全体がゆがめられた。  
以上の三条件は、どれももう過去のものになってい  
る。少子化が進んで志願者の数が減り、大学の入学定  
員とだいたい同じになった。企業も変わり、実力本位  
の人事や中途採用が増えた。有名大の新卒を奪い合う  
時代はもう終わった。多くの人が、入試に代わるも  
つとまともなシステムを待ち望んでいる。  
大学入試をなくすには、それより効果的な制度を設  
計しなければならぬ。制度が満たすべき条件をいく  
つかあげてみよう。

307

### 3 大学入試を廃止、新体制に移行——橋爪大三郎氏（東京工業大学教授）

- ① 日本再生の切り札は教育改革だ。まず、非効率的で必要でもない大学入試を数年以内に廃止し、より効果的なシステムに移行させる必要がある。
- ② 新体制では、学費の値上げ（奨学ローンとセット）を実施し、負担できる人すべてが入れられるようにすれば、社会人にも門戸が開かれる。また各大学は自らの特徴を明示すべきだ。
- ③ 高校についても、入試を廃止、書類選考化し、卒業や大学受験の資格にもなる検定試験を導入すべきである。

教育改革 識者の提言

まず大学はあくまでも、一部の人が専門教育を受け  
ける場である。今、高校進学率は九六%、事実上の義務  
教育である。それに対して大学進学率は四〇%ほど。  
どんな学生がどんな大学に進学するか、うまく決める  
メカニズムが必要だ。  
次にコスト。大学教育に学生一人当たり年間、私立  
で約百二十八万円、国立で約百八十万円かかる。学費  
収入はその半分かそれ以下にすぎない。負担の原則を  
明確にする必要がある。  
さらに、平等の問題。大学に学ぶ機会が、所得の高  
い家庭など特定の層に偏るのは望ましくない。  
また、教育にゆがみを与えないこと。学生がやる気  
を出し、大学が活性化し、高校以下の学校にも笑顔が  
戻るのが理想的だ。  
社会人に大学を開放し優秀者に奨学金を  
これらの条件を満足したければ、日本もさつさと、  
アメリカの大学のシステムをまねるといふと思う。  
アメリカには一流大学が約五十校ある。以下四流大  
学まで千校がひしめいている。そして二流ぐらいまで  
成大学」なら、数学と物理は高三レベルが必要、「ビ  
ジネスマン養成大学」なら英語と国語と地理歴史は高  
二レベルが必要、など。入学に必要な学力を認定する  
ため、全国規模の資格試験（英語なら英検みたいなも  
の）がいくつもあると良い。  
第三に、学費を高めにする代わりに、徴収した一部  
を、成績優秀者に奨学金の形で還元する。また、学生  
全員が銀行から奨学ローンを受けられるようにする。  
こうすれば、親の所得と関係なくだれでも大学に行き  
やすくする。  
奨学金と奨学ローンの仕組みは、やや複雑になる  
（試算例を含めた詳しい説明は、堤・橋爪編「選択・  
責任・連帯の教育改革／完全版」〈勁草書房、一九九  
九〉にあるので参考にしてほしい）。

このように改革すると、意欲さえあれば、だれでも  
大学に行けるようになる。その結果、進学率は高まる  
かもしれないし、負担が増すのでむしろ下がるかもしれ  
ない。いずれにせよ、社会的に見て最適の水準に落  
ち着くと考えられる。  
現状では本人の負担が少なすぎるため、行かなくて  
の大学は、けっこううまくいっている。  
アメリカの大学にはアドミッション・オフィス（A  
O）というものがあって、専門の事務職員が、書類審  
査で入学を決める。高校生は暮れから正月にかけて書  
類を出し、四月にはその返事が来て入学先が決  
まる。高校の成績や共通テスト（SAT）の成績、エ  
ッセー、クラブ活動や学外活動（ボランティアなど）  
が審査される。  
日本でもAO入試なるものが増えてきているが、実態は  
推薦入試で、アメリカのシステムとは別のものだ。  
では、具体的にどんな制度にすればいいか。  
まず第一に、学費を値上げして、実際の経費にみあ  
ったものにする（コストの自己負担）。そして、コス  
トを負担する限り、原則として誰でも大学に入れるよ  
うにする。入試が難しいからと、大学に入るのをあき  
らめる社会人が大勢いる。そうした人びとにも門戸を  
開こう。  
第二に、それぞれの大学が、わが校はどんな教育を  
する大学か、卒業や入学時にどれくらいの学力を要求  
するのかを決めて、発表する。例えば「理系研究者育  
いい人まで大学に行っている。それを税金などで一般  
国民が負担し、本人は受験で苦しんでいる。愚かなこ  
とだ。  
高校も書類での選考と学力検定  
この改革で、高校や小中学校の教育はどう変わるだ  
ろうか。  
中学から高校に進学するのに、高校入試がある。中  
学は偏差値輪切りの進路指導をするほかにない。結果、  
大部分の生徒は不本意な入学となり、意欲をなくす。  
そのあと大学を目指すには、高校の勉強では不十分だ  
から、塾や予備校に頼らなければならない。卒業する  
だけなら、まじめに勉強する必要はない。いずれにせ  
よ高校は空洞化し、教育目標を見失っている。  
高校を再生させるには、高校入試をやめて書類選考  
にし、だれでも受け入れる代わりに、卒業資格を明確  
にして、高等学校学力検定試験（略して高検）の制度  
を取り入れることだ。  
高検の自身と役割について、もう少し説明する。  
高校を卒業すれば、社会人として必要な、主要教科

309

308

の基礎学力や一般常識が身につけているはず。ところが、現状では高校の差がありすぎて、それが期待できない。ゆゆしい問題だ。そこで学力証明のため、高校を義務づける。

高検は、十分に易しい試験であることが必要だ。授業ではなく基本を出題する。自動車運転免許の学科試験のような、基礎学力をチェックするための資格試験（基準点以上は合格）を年に六回ほど実施、パスすれば高卒と大学入学の資格が得られるようにする。

高校は、高検準備の場として再生するだろう。易しいとはいえず外部試験だから、気が抜けない。教員と生徒が協力して、目標にいとむ。そのほか、進学・就職など個人個人の能力や需要に応じて、多様なコースやクラスを開く。行く手に高検があれば、小中学校でも授業に身が入ることだろう。

入試はなぜ有害か。それは、すべての受験生に、高校以下の内容で一点を争う競争試験を課すからだ。医師、科学者、新聞記者、プログラマー、法律家。それ

ぞれの資質は別のものだ。大学は、専門教育の場である。競争は将来の専門である得意分野であれば良い。模擬試験の偏差値で、進む学科を決めるなどはかけている。大学入試は、適材を適所に配分できないのだ。

しかも、入るのが難しく出てくるのが簡単では、学生はモラル（やる気）がわかない。これではアメリカと差が開くばかりだ。

日本を経済大国に押し上げた画一的な教育は、今やわが国の足かせになってきている。大学入試の廃止を含む教育の大改革をすぐ始めないと、日本はこのままでするとだめになる。入試を廃止し奨学金ローンを全面的に採用すれば、世代間の負担の公平と、数兆円にのぼる有効需要の創出が見込まれる。若い世代の人々に将来への希望を与え、自己責任と選択の自由を与えるのは、大人世代の義務である。

日本再生の切り札が、教育改革だ。教育改革国民会議の答申は生ぬるい。大学入試をなくさない改革は改革でない、と言いたい。

310

群像 3月号 (2001)

書評

昭和は遠く……

加藤典洋 橋爪大三郎 竹田青嗣

……【天皇の戦争責任】

千葉一幹

「天皇の戦争責任」と題されたこの書において問題にされているのは、言うまでもなく昭和天皇の戦争責任である。だが、今なぜ昭和天皇の戦争責任について論じねばならないのか。これは、分かりやすそうだが案外分りづら

この座談は、昭和天皇には戦争責任があるとする加藤典洋と他方戦争責任は問えないとする橋爪大三郎との対談に竹田青嗣が司会役として加わるといって進められている。戦争責任といえば普通、昭和天皇が侵略戦争の開始遂行等で重要な役割を果たしたことの罪を問うものだが、ここではそうしたことは問題にされない。加藤と橋爪の両者間で、アジ

アでの侵略戦争の罪は、天皇一人に課すよりも国民一人一人が主体的に引き受けるべきものとする合意が成り立っている。というのも、今日侵略戦争の責任を天皇にのみ問うことは、戦後を戦前から切り離し、戦後に生きる自分たちを戦前の問題について無責任にしようという無責任さと呼び込むからだ。ではどこに戦争責任を求めたのか。それは、法的、政治的、道義的責任の三つのレベルで論じられている。まず昭和天皇はその法的責任を大日本帝国憲法の「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」という条文により免責されている。政治的責任についても、橋爪が昭和天皇は大日本帝国憲法下で立憲君主としての自

己の使命を遵法精神を持って十分果たしたとかなり踏み込んだ見方を提示している以外には、両者とも、誤った侵略戦争を起こした責任は日本国民にもあり、天皇だけに責任を求めるわけにはいかならないとする点で差異はない。最後の天皇の道義的責任だが、加藤は、戦争で死んだ三〇〇万の日本人に対し天皇は道義的責任を負うとする。橋爪は道義的責任は個人的事柄であるから問題外とする。この差異は、両者の昭和天皇についての認識の相違の根幹を占めている。そしてそれは、戦争における日本人戦死者を戦後社会とどう結びつけるかという、より重要な問題についての両者の違いへと結びついていく。

加藤は、三〇〇万の戦死者は、侵略戦争のために死んだのであり、その点で「間違った」死であったが、それを戦後社会に生きる我々がこの「間違い」を「間違い」として受け止めて、同じ過ちを繰り返さないための思考に資することで戦争の死者と我々との間に、屈折した形であるが、関係の構築が可能だとする。それに対して、橋爪は、日本の戦死者たちはどういふ目的であれ召集に応じて従軍したのであり、アメリカ兵と同様「近代的個

人」としての「同時代的行為規範」に従っていた。戦後社会を生きた我々もまた同様な規範に従っているという点で戦前の死者と我々は「ストレート」につながっているとする。両者の議論では、加藤の方の分量が圧倒的に多いことにも因らうが、加藤に分があるように思う。だが、議論の勝敗巧拙とは別の問題がそこにはある。私自身も天皇はその戦争責任を問われるべきだと思っていたが、昭和天皇の亡き今、欠席裁判のような形でそれを論ずることも詮ない。天皇の戦争責任を追及せぬまま昭和という時代の終焉に出会ってしまった我々が、それを追及せぬまま天皇を死なせたことも含め、戦争責任の問題をどう考えるのかと問う場合、分の悪い橋爪の方がこの問題を深刻に受け止めているように思う。それは、橋爪の、この座談会を開く動機が不可解に現れている。

この座談会の発端について、橋爪は、日本の「戦後の言論」を「相対化するような大きな仕事」をしている加藤典洋が「天皇に戦争責任がある」と言っており、「天皇に戦争責任がない」とみなす自分とは考えが違うので、この違いを明確化したいと思ったことにあると語っている。橋爪自身一貫置いている

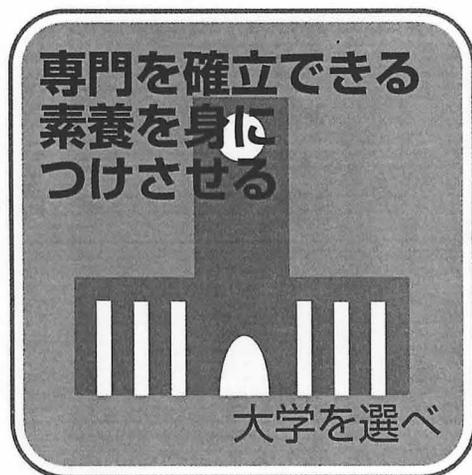
加藤が自分と異なる考えを持っていることがこの座談の端緒というのだから、その動機自体かなり個人的なものといわねばならない。奇妙なのは、なぜそんな個人的な違和感という形で公にせねばならないのかということだ。しかも、橋爪は「天皇に戦争責任はない」という立場であり、そこにもうひとつの不可解さの淵源がある。昭和天皇自身戦犯とされなかったのだし、七五年・八四年・八九年に実施された天皇の戦争責任についての世論調査でもいずれも若干ではあるが、天皇に戦争責任はないとする方が、ありとする方を上回っている。世論に天皇の戦争責任を問うという空気が明確にあるわけでもない（世論調査は吉田裕「昭和天皇の終戦史」を参照）。つまり、敢えて天皇に戦争責任はないという立論をする必然性が希薄なのだ。

ではなぜわざわざそんなことをするのか。それは橋爪の言葉とは裏腹に、橋爪には、昭和天皇の存在を抜きにして戦争あるいは戦後の社会について考えることが不可能であると思われたからではないか。昭和天皇の呪縛がそれだけ強いということであり、その呪縛から逃れられないうちは、主体的に今日の日本社会について考えることも困難だと感じられ

たからではないか。多少の無理は承知で昭和天皇を第二次世界大戦に対し無責任であると強弁することで、戦後日本社会を覆ってきた昭和天皇の影から自由になろうとしたのではないか。これは橋爪だけの問題ではないが、私は昭和天皇の影をこの本における「天皇」という語の用法の揺らぎに感じた。「天皇」という語で天皇制を意味したり、昭和天皇を意味したりしているが、平成である今日、「天皇」といえば普通平成天皇のことを意味するはずだ。彼らはまるで未だ昭和であるかのような語り方をしている。

天皇を無責任にするという橋爪の主張は、結局昭和天皇の亡霊に憑かれていたことの告白になってしまっているように思う。私はそれを批判したいのではない。天皇の責任を問う加藤よりも、天皇の責任を否認しようとする橋爪の方がはるかに天皇の問題を生々しく感じているように思われるからだ。かつて、「降る雪や明治は遠くなりけり」と詠んだ俳人がいたが、昭和が終わって十二年経過した今日でも、昭和は遠くならないのである。

(後書房刊・本体二九〇円)



### 今の大学生は (旧制)中学生レベル

大学を卒業すればいい就職があるという考え方は、実際かなり前から崩れています。就職を目的にして大学進学を考える人は多いでしょうが、大学に行くことは就職に役立たない。大学を出たからといって、特別優秀な能力を身につけられるわけではなく、なまってしまったからです。

昔は違いました。戦前の学生は、語学能力、基礎学力ともに優れ、社会的評価も高かった。例えば大学を卒業すると原書は読めたものです。今の大学院修士以上の学力があったでしょう。

昔の大学生は、優秀であることが当然であるとされたため、何かを知らない、できないことを恥じた。大学進学率が1〜2%という状況において、社会のエリートたる矜持もありました。

## 大学で身につけることは 専門を確立でき 基礎素養

東京工業大学大学院 社会理工学研究科 価値システム専攻・教授

橋爪大三郎

しかし、同年代の40%が大学に行く時代になり、今の大学生にはそうしたプライドはない。何事も、「できない」「知らない」が当たり前になり、勉強するとネクラとさえ言われてしまいます。現代の学生は、情報に詳しいだけで基礎的な学力は低いといわざるを得ないでしょう。戦前の(旧制)中学生レベルです。

### 「勉強しろ」「就職しろ」ともつと親は要求すべき

では、就職に役立つわけでもないのになぜ大学に行くのでしょうか。大学進学しなければ、ますます就職がないというだけです。大学進学は、必要条件であつても何の決め手にもならない。よほどしつかりとした覚悟と目標がないと、時間とお金の浪費になってしまふ。行かないわけにはいかないが、行

つても無駄というのが現実です。

こうなつてしまった背景にはさまざまありますが、とりあえずなすべきことは、子供を大学に進学させる親は、もつと子供に要求すべきでしょう。「勉強しろ」「きちんと就職しろ」と。そうすることによって、子供にも大学に行くことの意義を考えさせる。大学に入れたことで安心してはいけません。重要なのは、どの大学に入るかではなく、そこで何を勉強したかです。

さらに、大学は先生で選ぶこと。若手の優秀な先生は、有名大学ではなく、地方国立大学や二〜三番手の私立大学に多いと思います。

学生が大学に入つてすべきは、社会人として必須となる基礎素養を身につけること。今の大学は専門教育ではありません。国際、環境、人間といった学際的な専門ではなく、哲学、法律、経済、政治、芸術、コンピュータサイ



プロフィール：はしづめ・だいさぶろう 1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科社会学専攻博士課程修了。専門分野は、理論社会学、宗教社会学、現代アジア研究。主な著書に『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『橋爪大三郎コレクションⅠ〜Ⅲ』(勁草書房)などがある。教育制度改革への提言として、『選択・責任・連帯の教育改革(完全版) 学校の機能回復をめざして(共編)』(勁草書房)がある。

エンスなどなど、何らかのクリツとした専門を決め、その基本的枠組み、全体像を修得すべきでしょう。

大学で身につけるべきことは、手近な情報だけで物事を判断することを避けるために、原典にアクセスする手段です。流行っていないことのなかに本質があるからです。会社に入つてからも、情報を取つてこられる能力は重要です。本来の大学生と大衆の大きな分岐点の一つは、テレビや雑誌などのマスメディア以外から情報収集できるかどうかなのです。

(談)

# 「無競争」「豊かな」時代の子どもたちに「学ぶ意欲」を持たせる仕組みをどうつくるか ① めいめいが自分のペースで、友だちに 刺激されながら自分の目標に 辿り着こうと頑張る本来の競争を

東京工業大学教授  
橋爪大三郎



## どの子も満足できるレースに

学ぶ意欲のある子と学ぼうとしない子に二極化していると聞きますが、当然の成り行きだと思います。マラソンのレースを考えてみてください。ヨイドゥンで一斉にスタートしますが、そのうちどんな差がついてくる。先頭集団にいる人たちはよし行けるぞと、周りからの声援を受けて、苦しいながらも頑張ることができましょう。でも、先頭にうんと引き離れた後ろの方では、ただ苦しいばかりです。「どうせゴールまで行つたつたかかかかかかか」と、レースを放棄してしまう人も出てくるかもしれません。いまの学校教育は、まさにマラソンレースのようなものです。小学校から始まり、中学校、高校、大学、さらには大学院と、学ぶ期間が「長

距離」になりすぎている。じわじわと順位が下がっていくと、どこかの地点でいきなり大逆転ということは、まずありえません。

どうすれば、どの子も満足するレースができるのか。そもそもレースのあり方が間違っているのです。順位を競うのではなく、自分のペースで走り、ゴールに辿り着けばほめられるものにすればいい。その実現のために提唱しているのが、高校卒業に相当する学力を認定する外部基準のテスト「高校検定試験」です。「入学した学校の偏差値ランク」ではなく、「高校を卒業するに値する学力」という共通のゴールに到着すればいいという考え方です。

## 「選んだ」という満足

子どもが楽しく学べる授業に力を入れている

親は子どもを一人前に育てる責任があります。ですから、必要なら子どもの意思にかかわらず、勉強させていいのです。そのためには、大人と子どもの信頼関係が必要です。大人の言うとおりに学べば大丈夫だと子どもが思えることが大切です。

学校教育は、子どもとその親に対するサービスです。親は子どもに責任を持つ以上、学校に対し、もっと積極的に意見を言うべきだし、学校の選択もできることが大切です。しかし、いまの学校は親の口出しを嫌がる。親を煙たい存在と考えているが、それではだめです。

まず学校が先にあると、カリキュラムがつけられ、子どもはそのカリキュラムどおりに学ぶ。いまの教育は、まるで工場と同じです。その反対に、まず地域が存在し、地域の子どもが通う学校をつくる。それにはどんなカリキュラムがよいか、校長や教師はどんな人材が必要かを考えていくという、発想の転換が大切です。

その実現に向けた方法の一つが、学区制の廃止です。自分の子どもに合った学校を主体的に選ぶことで、親が教育の責任主体であることがつきりします。学校も、自校を選んでもらうと教育の充実を図るでしょう。初めは設備の違いなどで人気の差がつくかもしれませんが、

過渡的な問題に過ぎないと思います。教育はあくまでも「ヒューマンパワー」の養成ですから、徐々に中身の充実が焦点が移っていく。そのうち、学校のカラーや子どもとの相性なども考慮するといふふうに着いていくと思います。「この学校を選んだ」という意識は、親の満足度を高めます。最近、いくつかの自治体で、学区制の自由化を実施し始めましたが、よい方向だと思えます。

## 本来の競争とは

私の提言の中には、実現に向かっているものもありますが、まだまだ時間がかかります。それなら現行のシステムの中で、子どもに学ぶ意欲を持ってもらうにはどうすればいいか。私は、その道のプロフェッショナルから、子どもたちがじかに学ぶことも大切だと思えます。

例えば、パン屋さんと一緒にパンづくりをする。同じ材料を使っても、膨らみ方や食感が全然違うことに、子どもたちは驚き、その技能に尊敬の念を抱くことでしょう。そこまで到達するには数え切れないほどの修練が必要であることや、プロの厳しさを学ぶ子もいるかもしれません。そのような機会を増やすことで、情報を大量消費するマスメディアに振り回されること

学校や教師が多いと聞きます。でも、この「学ぶ意欲」重視の姿勢は、ともすれば子どもにもおもしろい、学びたくなければ無理に学ばなくてもいいという考え方になりかねません。

義務教育段階では、子どもたちに半ば強制的に覚えてもらった方がいい内容も多いと、私は思います。なぜなら、子ども本人の利益になることが明々白々だからです。

ほとんどの人が、字を読み、かんたんな計算ができる。これは、日本の義務教育の定着度が極めて高い証拠だといえるでしょう。漢字を覚える学習は、あまり楽しいことではないかもしれませんが、学校で習った基本が身につければ、社会に出たときに再教育なしですみます。学んだことの利益は、実際に社会に出たとき、初めて実感できるのです。

のないコミュニケーションの方法を身につけることができる。そういう機会がないと、自分のこれからの目標を見つけるのはむずかしいと思うのです。

競争をよしとしない風潮が学校にはあるようですが、この社会には競争が現に存在しています。相對評価を前提とする学校内での順位付けは、せいぜい受験競争の目安になるとしても、実社会では意味を持ちません。1番でも100番でも、パン屋さんはパン屋さん。おいしいパンがつくれれば、そこへ買いに行くのです。

社会の中の競争は、もっと優しくてアバウトなはず。クラスの中で何位などという競争を強いるのではなく、ここまで学べばよいというゴールを設けてやる。そうすれば、めいめいが自分のペースで、友だちに刺激されながら一杯頑張ることができそうです。それが本来の競争だと思えます。周りにたくさん仲間がいる学校でこそ、そういう社会性を持った意欲が育てられるのではないのでしょうか。

(談)



●はしづめ だいさぶろう 社会学専攻。主な著書に『選択・責任・連帯の教育改革/完全版』(勁草書房)『幸福のつくりかた』(ポット出版)『世界がわかる宗教社会学入門』(筑摩書房)など。

そのさびたおひり、昭和天皇の戦争責任の有無を論戦というかたがたで考察する本である。加藤は天皇に責任ありと主張し、橋爪は無いと言ひ、竹田は間に入って行司役をせよとめる。緻密な議論が五百ページ近く続く。これに途中でもめられたいほどおもむき、その理由(等)も三人が実際に卓を囲んで議論するという形式がこのテーマに合っていたからであり、加藤と橋爪の主張の隔たりがこのテーマを総合的に論じるのに最適だったから。両者は自説を述べつつ、相手の言ひを聞き、反論する。言ひをみれば、長いラリーを可能にするだけの「コート」の広さ(ネットの適切な高さ)が、それにより二人の俊儀がある。

竹田の「まげなき」がわかりやすい。彼は今までこの問題で「相手が屈かないサーブを交互に繰り返すような不毛のゲーム」で相手に屈かないサーブを交互に繰り返すような不毛のゲームだった。この二人の言葉は噛み合ひ、話が弁証法的にうまく展開して行く。結論を言ひた後は最後までお互いを説得論戦して意見を交わす。そのまげなきの意図だが、しかしそのに至る議論の中で、この戦後日本精神史の最大課題の論点をすべてきちんとして整理した形が出てくる。

コミットメントを一方的に打ち切ったから。それに対して橋爪は「政治的な責任については、天皇は本来政治的な存在でなく、政治的に行動すべき立場になかったのだから、政治責任は生じようがない。たまたま政治的に行動せざるをえない局面のなかでは、昭和天皇はベストの選択をしている」と言ひ、つまり、立憲君主制のもとでは違法な行為をしない

いかり君主は責任を問われないうとつづけた。この前提から始めて、二人は満州事変から東京裁判に至る昭和天皇の各局面を具体的に検証してゆく。橋爪がベストの選択として呼ぶ天皇の判断に対して加藤は「結果オーライ」と「信賞必罰の不実行」という問題がいつまでもつづいたと言ひ、行司役の竹田が橋爪の説を受けて「天皇は近代的な立憲君主たるものとしていたが、さまざまな制限からそのことをうまく実行できなかった」といふ像がかなり実情に近かったとつづけた。天皇がそういう立場にあった以上、誰も彼の戦争責任を追及できないう言ひ方にはすべてにはならぬ、というのが僕の感じだ」と言ひ、

びに日本国憲法における天皇の職掌は分けるべきではないか。天皇の名において開戦をしたから天皇の名において終戦を宣言した。これは当然。しかし、その間、大日本帝国は天皇の名において戦争を遂行していたのだ。その名の下に国民は戦場に赴き、戦死し、あるいは民間人の身分のままに殺されたのだ。では、昭和天皇個人ではなくその「天皇の名」に責任は生じないのか。王がたまたま強運であれば国民は幸い、暗愚であれば不幸、という運命論から国家を救ったために立憲君主制へのものが作られた。王の職掌と王の人格を切り離す。その趣意に従えばこの「天皇の名」は戦後のある時点で閉じられるべきだった。つまり昭和天皇は退位すべきだった。大日本帝国憲法に退位の規定がないという橋爪の指摘はあまりに形式論に思われ、(と

する責任という加藤の説(重なるか)。昭和天皇の戦後の沈黙はもったいない問題である。なぜ回顧録は書かれなかったか。一九七五年に戦争責任について問われた時、なぜ「そういう言葉のまやについては、私はそういう文章方面はあまり研究もしていないのでよくわかりません」と答えたのか。死者への責任が言葉のまやか。あるいは、「一九四七年九月」といつ時点で、たとえばその人(昭和天皇)はアメリカに沖縄の軍事基地としての使用を提案しているけれど、沖縄戦惨敗の将大田実として「沖縄県民斯く戦へり、県民二対一後世特別御高配万願ハランコトヲ」とま打電させた沖繩をなぜ彼は棄てたのか。いや、これは戦争論ではなく人格論になってしまった。いざれにしても昭和天皇は戦前戦後日本の要の位置にあった。そこに返らなければ前には進めない。これは過去のくびきからわれわれを解放するための必読の書である。

### 池澤 夏樹 評

加藤典洋、橋爪大三郎、竹田青嗣著(径書房・2000年)

「ついでに」の議論は「もしも」それは論者によって、彼が『革新派』に属するか『保守派』に属するかによって、その答えがほぼ自動的に決定されるような問題として存在してきたことと言ひ、つまり広すぎる「コート」

加藤は、昭和天皇にはまず日本

いかり君主は責任を問われないうとつづけた。

びに日本国憲法における天皇の職掌は分けるべきではないか。

する責任という加藤の説(重なるか)。

## 論戦で解く戦後日本精神史の最大課題

### 第1部 ● 21世紀型戦争

## ハンチントンの誤り

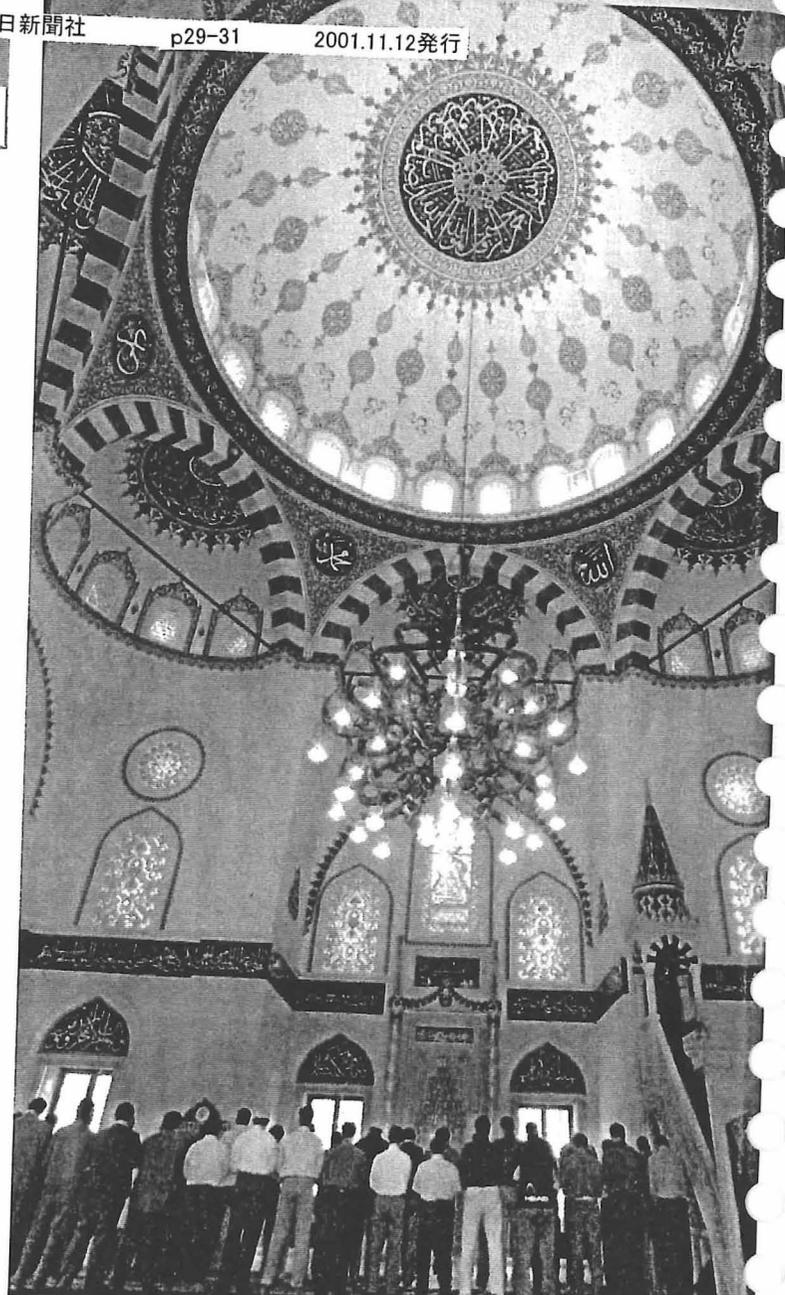
# 米同時テロは「文明の衝突」ではない 対立を回避する道はある

橋爪 大三郎 はしづめ だいさぶろう 東京工業大学教授(社会学)

紛争の原因を宗教に求めてはならない

アメリカへの同時多発テロの背景に、イスラム教文明とキリスト教文明の対立を読み取る人も多いかもしれない。ハンチントンのいう「文明の衝突」が眼前に惨劇となって繰り広げられた、というわけだ。けれどもそれこそ、テロリストの思うつぽ。私は「文明の衝突」論はリアリティーに欠けた議論であると思う。ひとつころそれがもてはやされたのは、冷戦を終えたアメリカの特殊事情もあった。冷静にそのあたりを見るとうなるか。

冷戦時代、米ソは軍拡競争に明け暮れ、巨額の軍事費が費やされた。



2001-2-11

ハンチントンの誤り

ば、何をしてもおかしくないという心理に陥る。地球資源も限られている中で、すべての人に希望を与えるのは難しいことだが、「文明の衝突」論は、希望を作り出す責任を放棄するものだ。アフガニスタンで軍事衝突が起れば、再び、たくさんの難民が生まれる。失うものがない難民は、テロリストの温床になる。戦争で親兄弟をなくした若者たちに、テロリストが声をかける。「アメリカのせいだ、アメリカは大悪魔だ。資金は出すからコマンドになって活躍しないか」と。

いまのアメリカは独善性が強すぎる。アメリカ以外は、自治能力のない国ばかりだと思っているから、世界の警察官として出ていく。確かにアメリカが世界的に軍事力を展開しないと、国際秩序はもつと混乱するから、アメリカには感謝しなければならぬ。しかし、軍事力だけで話が終わりなら、子供のけんかと同じだ。腕力の強いお兄ちゃんを連れてくれば、それで終わりとはいかない。問題はその先にある。同じ事件や紛争を繰り返さないために、もつと細かな工夫、知恵が必要だ。たとえば、難民の生活安定、固有文化の尊重、産業振興などの長期プログラムを準備しなければならない。

宗教が紛争の原因であるかのように語られる。しかし、政治的な対立

を宗教の対立として装うのは、政治がよく使う手法だ。宗教的な対立が先にあるのではなく、何かほかの原因を考えるべきで、順序が逆だと思ふ。今回のような惨劇を目にすると文化、文明の違いを乗り越えるのは難しいと、短絡的に反応してしまいがちだ。たしかに異なる文化同士は、なかなか理解し合えないし、おおむね偏見を持ち合う。でもそれでは、多くの人がとが連帯し団結し協調することができないので、人類は、文化や民族を超えて連帯する工夫を生み出してきた。それが文明だ。ある宗教を信じる者はすべて平等だとか、ローマの万民法なら、どの植民地、どの民族であれローマ市民権を持つ者は平等な扱いを受けるとかいった、工夫を生み出してきた。

対立を回避する思想  
「多文化主義」

問題は、文明がまたらに分布していることだ。文化の相違や対立を克服する工夫である文明も、ほかの文明とは対立するので、文明の上位概念が必要になってくる。国際社会とか国連とかの枠組みはある。それでも近代以降、キリスト教文明が世界を主導し、イスラムや中国文明は従属的な位置にある。たとえば、英語はローカルな言語だが、グローバルな言語としてふるまっている。アラ

ビア語、中国語はもとも英語よりグローバルな言語だったが、英語の前でローカルとされてしまう。ローカルなのがグローバルになっていくのは自然なプロセスだが、それは同時に不平等を生み出す。基軸となる国が、おおむね利益を享受するからだ。ローカルなところを残す文明が、グローバルスタンダードに値するの、いつでも異論がありうる。資本主義にしてもローカルな部分が残っているから、それがグローバル化、国際標準化するプロセスで摩擦が生じる。

グローバル化のメリット／デメリット、コスト／ベネフィットをどう処理するか、これまでは成りゆきだった。みな認めるルールで処理してきたわけではない。その結果、利益をうる人と損する人が出てくる。この矛盾が一カ所に集中すれば、絶望を生み、テロリストを生む。グローバル化のコストやデメリットを処理するシステムを作り出すことが重要である。文化や文明の違いが即、対立や紛争、テロや戦争をひき起こすわけではない。そこに至るまで、いくつもの媒介変数がある。日本は、このメカニズムについての理解が乏しく、文化や文明の違いをすぐ衝突に結びつけてイメージしてしまいがちである。

戦前の日本は、多民族国家を自認

し、台湾、朝鮮も日本だとした。戦後はそれを忘れて単一民族を自認する。多民族を前提とすると、国内体制のコストは高くなる。民族が違えば相手はどう行動するか、どう考えるかの予測がつきにくいので、制度にのりしろをとっておかないとうまくいかないからだ。しかし、いったん多民族を前提する制度ができれば、外国とリンクする際のコストは安くなる。アメリカは多民族国家なので、国内のコストが高いが、グローバル化しやすい。日本はその反対に、国内のコストを小さく抑えている分、グローバル化に対応できず、そのメリットを享受するのが難しい。

ポスト冷戦の新しいトレンドとして、多元主義、多文化主義が前面に出てきた。違いのあるまま、現状のまま共存をはかる。差異を享受する、楽しむ。イランのハタミ大統領の文期間対話の提案もその流れだ。ヨーロッパやオーストラリアでも、多文化主義が正統となりつつある。オーストラリアは、労働党ホイットラム政権の時代に白豪主義を捨て、アボリジニの人権を抑圧してきた過去を認め、多民族共存に努めている。アメリカの公民権運動も多元主義的な考え方だった。困難な試みだが、対立、紛争を克服する試みとして、評価に値する。わが国も真剣に、これらを学ぶべきではないか。

90年代にはそれが一転して、軍事費削減はアメリカだけで3000億、この「平和の配当」のお陰でアメリカ経済はここ10年、繁栄を享受することができたといつてもいい。一方で、当然ながら軍事産業は勢いを失った。しかし、軍事産業の衰退はアメリカのハイテク基盤の弱体化につながり、軍事力を背景にしたアメリカの一国支配体制の基盤を揺るがしかねない。そこで、冷戦当時のソ連に代わる、新たな「敵」の存在が必要になった。対立の構図を維持するための、仮想敵と目されたのがイスラム、中国の二つの文明圏だった。ハンチントンとそのグループの着想はそれなりの影響力を持ったが、その背景には、アメリカのそうした国内事情があった。

弱者の戦略は  
衝突ではなく協力

「文明の衝突」論には、当たっている部分もある。イスラム、中国文明を偉大なライバルと認めている点だ。両文明とも近代化に手間どっている。それには二つの理由がある。ひとつは、どちらも世界的な文明超大国だったということ。

イスラムは、サラセン帝国以来の、輝かしい歴史を持っている。中国も清朝の後半からは列強に侵略されたが、それまではどの王朝も、常に世

界で最大最強の国家であり続けた。もうひとつは、どちらもキリスト教とは異なる独自の宗教を持っていること。これらの理由により、どちらの文明も強烈なプライドと価値観が邪魔をして、西欧の制度を取り入れることに抵抗があり、近代化が難航した。

宗教が強烈だと、伝統的な行動様式に縛られる。清朝は儒教のシステムにがんじがらめになっていたため、近代化に抵抗が起り、「洋務運動」も失敗した。イスラムも同じで、社会制度がイスラム法に規定されるから、なかなか西欧流の政治、経済システムに適合しない。民主主義や資本主義の制度と折り合いをつけるのに時間がかかるわけだ。

こうした事態を「文明の衝突」と呼ぶべきだろうか。私はそうは思わない。大多数の中国、イスラムの人びとは、近代化を成功させるべきであること、それには欧米と衝突するのではなく、同盟・協力した方がいいことは、百も承知である。自分たちの文明に問題点が多いことも、よく知っている。いまは欧米が強者で、イスラムや中国は弱者だ。弱者の戦略は強者との同盟であり、衝突は最悪だ。日本も、近代化の過程でイギリスと同盟を結び、繁栄することができた。戦後は日米同盟がその役割を果たした。

ところがテロリストは、協力よりも衝突を選ぶ。テロリストの特徴は、まず第一に、弱いこと。相手に戦争を仕掛けるほどには強くない。第二に、正当性を主張すること。相手が絶対に間違っていると信じ込み、自分の正しさに疑いを持たない。第三に、性急なこと。いま行動しなければチャンスを失うと思っている。アメリカは数年前、ビンラディンの暗殺を企てたことがあった。いずれ捕獲作戦を行うつもりで準備を進めていたかもしれない。アメリカの意思通りに事が進めば、これまで築いたテロ組織もムダに終わってしまう。そこで、相手が動き出す前にこちらが先制攻撃をしなければチャンスが失うという焦りがあったのではないだろうか。

以上、三つの特徴から、テロリストは二段階の戦略を考えているはずだ。第一段階で、派手な作戦を成功させて、まず相手の面子を傷つける。相手を打ち倒すほどの力はないから、反撃も覚悟しているだろう。第二段階では、英雄的な作戦行動をきっかけに、広範な一般大衆が立ち上がることを期待する。「ジハード」はその合言葉だ。

テロリストを生む背景にはアメリカ

の、「敵の敵は味方」という短絡的な戦略がある。イラクのサダム・フセインがそうだった。アメリカはイラン革命との対抗上、サダムを支援した。ビンラディンも同じで、アフガニスタンに侵攻したソ連に対抗するため、コマンドとして送りこんだ。ビンラディンにしてみれば、アメリカのために尽くしてきたのに情勢が変わると簡単に切り捨てられ、危険分子扱いされる。アメリカにかつて支援された勢力が、アメリカを逆恨みするというケースが多くなっている。

「敵の敵は味方」というブラグマティックな発想は、相手の価値観や政治体制がどうあろうと、アメリカの当面の利益にかなえば誰にでも支援するということだ。非民主的な政権も応援してしまう。アメリカがいま支援している北部同盟も、ゲリラという点では、タリバンと似たようなものである。その場限りのつながりで利用し尽くし、あとは切り捨ててしまう。こんなやり方は、長期的には、目先の利益を上回る損失になる可能性が高い。敵の敵が本当の敵になってしまうこともあるからだ。アメリカの外交戦略はもつと成熟しなければならぬ。

テロにつける最良の薬は「希望」だ。一步一步前進しているという確信が、暴力を遠ざける。希望を失え

2001-2-12

# 「アフガン戦争の大義」「テロと特攻の混同」 宗教を知らねば世界は理解できない

## ■宗教社会学 ■「宗教はハマると怖い」と距離をおく日本人が知っておくべき世界の常識

「宗教を理解するとは、ある国家・民族の信念体系を理解するということ。日本の常識が世界の非常識となっているのはなぜか」と言いつつ、日本人の宗教音痴が原因なのです」

「世界がわかる宗教社会学入門」(筑摩書房刊)の著者、橋爪大三郎・東京工業大学教授はそう語る。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教から仏教、日本人の宗教観まで、橋爪氏が世界の宗教を理解するエッセンスを指南する。

アメリカの同時多発テロで、ハイジャックされた旅客機が世界貿易センタービルに突っ込みビルが倒壊した。聞けば犯人はムスリム(イスラム教徒)ではないか。「やっぱり宗教は怖い、だから宗教とテロは嫌だ」というのが日本人の平均的な反応だとするなら、そのとらえ方は間違っている。宗教とテロはまったく相反するものだからだ。テロは破壊活動である。宗教は反対に、秩序をつくり、恒常



OGASAWARA  
【PROFILE】1948年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学大学院社会学研究科価値システム専攻教授。専門は社会学。著書に「言語ゲームと社会学論」「仏教の言説戦略」「はじめての構造主義」など多数。

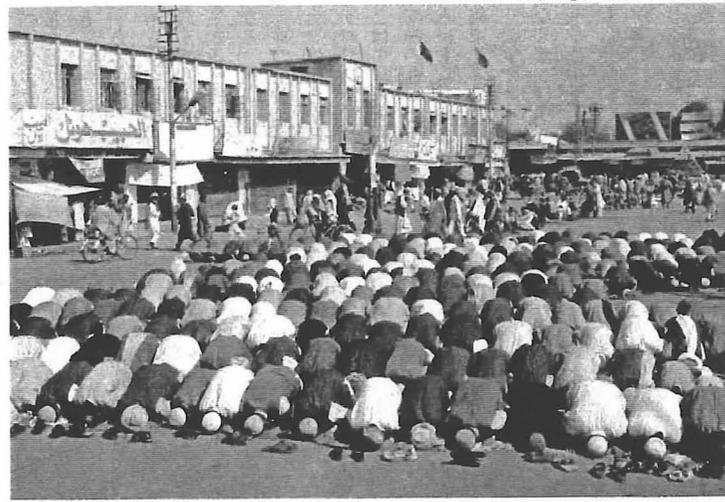
しかし困ったことに、宗教は世界各地に自然発生的に生じるもので、いきなり地球全体をカバーするものは現れない。たとえて言えば、コンピュータのOS(基本ソフト)であるウィンドウズとマックとリナックスのようなもので、バラバラに出てきて、それぞれにファンがいて、一つにハマると他のものは使にくい。その中で一番優れたものが普及するとは限らないから、少数派が多数派に比べて劣っているとも言えない。すると少数派は諦める理由がないから、睨み合い状態がずっと続い

ていく。また、残念なことに、宗教は互いに偏見を持つようになっている。現実の見方が違うのだから、ある宗教から他の宗教を見れば、必ず間違っている。キリスト教徒の目にはイスラム教徒がフタを食べないのは実にバカバカしく映るし、イスラム教徒にはキリスト教徒がアルコールを飲むのが理解できない、ということになる。

東京工業大学教授  
**橋爪大三郎**  
HASHIZUME Daisaburo

イスラム教は三つの中では最も新しく、預言者ムハンマドによって創始された。その教えは「タウヒード(神の唯一性)」に要約でき、キリスト教の三位一体とは決定的に異なる。イスラム教では、アブラハム、モーゼ、キリストも預言者とされるが、なかでもムハンマドこそが最高の預言者であり、彼を通して語られた神の啓示が「コーラン」である。コーランが神の定めた法であるため、すべてのムスリムがメッカに巡礼するなど、イスラム教徒は基本的に一つに

一方、キリスト教はイエスが早くに死んでしまい、教義が完成しないうちにスタートしたので、信徒(の代表)の全体集会である公会議で決まった「学説」が信仰の基準となった。この学説に背くものは異端となり、異端の考えに固執していると、ついに悪魔とされ、殺されてしまふ。異端や破門、中世にあった悪魔祓い、善悪二元論といった考え方は、血なまぐさい宗教



Paula Bronslein Getty Images AFLO FOTO AGENCY  
上/イスラム教徒にとっての「シハード」は必ずしも武器を取って戦うことではない。(パキスタンのクエッタでの礼拝風景)  
下/キリスト教徒にとっての「神の命令」を遂行するアメリカ。(就任に際して聖書に手を置いて宣誓するブッシュ米大統領)



Mark Wilson Getty Images AFLO FOTO AGENCY

「シハード」は必ずしも武器を取って戦うことではない。(パキスタンのクエッタでの礼拝風景) 下/キリスト教徒にとっての「神の命令」を遂行するアメリカ。(就任に際して聖書に手を置いて宣誓するブッシュ米大統領)

2001.12.10発行

# なぜテロを、 アメリカは 憎むのか



## 橋爪大三郎

Hashizume Daisaburo

1948年生まれ。東京工業大学教授。  
著書に『世界がわかる宗教社会学入門』『政治の教室』等。

9月11日、ワールドトレードセンターほかで同時多発テロが発生し、罪のない民間人（インセント・シティズン）数千人が殺害された。これをブッシュ大統領は「戦争」だと表明、国をあげて報復に立ち上がった。日本政府は、小泉首相が自衛隊の派遣を決めるなど、まず機敏に対応している。しかし国民は、アメリカのテロに対する怒りと憎しみを、ちゃんと共有できているのだろうか。

しばらく前、「なぜ人を殺してはいけないのか？」という質問が流行った。こんなことを疑問に思うようでは、テロに対する怒りを理解できないと言いたい。日本人は、人を殺す／殺さないの違いにこだわり、殺し方の違いに注意が行かない。だが、人の殺し方にもいろいろあり、その違いのほうを重視する文化もあるのだ。

キリスト教、とくにプロテス

タントの考え方からすると、人を殺すことが無条件に悪いとは言えない。もちろん、十戒には「殺すな」と書いてあるから、人を殺してはいけない（神の命令に背く）のだが、現実に殺人者が出てきたらどうするか。

つぎの犠牲者が殺される前に、殺人者を殺すのが正しい、と考えることができる。中世までは復讐法で、自力救済が認められていた。近代国家では、隣人愛の観点から、国家の武力独占と行使が正当化される。軍人は軍人と戦い、民間人を殺してはいけないという原則もできた。これは、戦時国際法として一般化し、国際社会のルールとなった。無差別に民間人を犠牲にするテロは、これに違反している。最低最悪の人の殺し方なのだ。

そこでアメリカは、ルール違反の殺人者を殺す正義の戦いに決起したわけだ。戦争は、武器を持った軍人同士が、互いの身

を危険にさらして戦う。相手を殺すとしても、自分も殺される可能性があったから、公正（フェア）と言える。しかし、無抵抗な市民の命を奪うテロや虐殺は、自分は安全な場所に身をおき、虫けらのように人を殺す非人間的な仕業である。テロに対する憎しみは、この殺し方を憎むところから生まれる。

テロの拡大を防ぐためブッシュ大統領は、ハイジャックされた民間機の撃墜を命令していたことが明らかとなった。大勢の民間人を救うために少数の民間人を犠牲にするという論理も、テロと戦うためには正当化されるのだ。

この感覚、この思い切りを、日本人がどこまで共有しているだろうか。この感覚のギャップが、国際社会に生きる日本の問題点になる日が来るかもしれない。



ているのだ。それまでは神の命じた通り、罰の状態で正しく生きていかなければならない。だから、この不完全な世を少しでも完全に近づけること、神の正義を実現していくことが彼らの生きる目的となり、国家目標となる。

神の正義に照らしてみれば、テロは明らかに悪だから、テロリストに反対することはキリスト教徒にとって神の命令である。だから民主党も共和党もなく結集して全力で戦うのだ。戦争とテロを比べて、なぜテロは卑劣なのか。戦争は相手を殺すけれども自分も殺される可能性がある。だから公平であり、道徳的だ。テロは武器を持っていない相手、しかも攻撃されることを予期していない相手を殺す。卑劣で非道徳的であり、こんなことをする人間はどんな手段を使っても殺してしまわれない。

ところが日本人には、人を殺すか殺さないかということに境界線がある。

しかも日本人は、人を殺してはいけないが、自分の命を投げ出す場合は例外的に許されると考えている。純粹な形で自分の主張を通す究極の方法は自殺することなのだ。例えば心中は、



「日本は宗教理解の過渡期」と橋爪氏は指摘する。

を「ついでに」と思われる。日本の場合、ある事柄を極端に主張する方法の一つとして自殺というものがあられ、それは精神の純粹さを表わすから、特攻隊を一種美しいものだと思ってしまう。

そこで日本人は、自爆テロと

特攻隊の区別がどこかあいまいである。しかし特攻隊は作戦計画の一部として戦術目標に突っ込んだもので、自爆攻撃ではあっても、決してテロではない。日本人には仏教の抽象思考が難しすぎた？

日本人が宗教をよく理解できない理由は、その根本は、いわゆる宗教というものを必要としていないからだと考えられる。世界の主だった宗教が誕生する契機となったのは農業革命だった。栽培植物ができ、大規模な灌漑農業が始まった。麦作農業は灌漑によって大量の余剰生産を生み、人口を増大させる。各地から集まってきた多民族が競合し、社会にさまざまな矛盾が生まれる。民族間での土地の奪い合いから、戦争やジェノサイド（虐殺）も起こる。

また、江戸幕府は儒教（孔孟思想）なかに朱子学を官学としたが、武士と儒教ほどミスマッチな組み合わせはない。朱子学では武力によって政権をとることは霸道であり、儒教の正統な統治原理（王道）ではないから。そして朱子学では分離して「忠孝一如」の原則をつくらなければならない。この感覚、この思い切りを、日本人がどこまで共有しているだろうか。この感覚のギャップが、国際社会に生きる日本の問題点になる日が来るかもしれない。

ない理由はいくつかあるが、その根本は、いわゆる宗教というものを必要としていないからだと考えられる。世界の主だった宗教が誕生する契機となったのは農業革命だった。栽培植物ができ、大規模な灌漑農業が始まった。麦作農業は灌漑によって大量の余剰生産を生み、人口を増大させる。各地から集まってきた多民族が競合し、社会にさまざまな矛盾が生まれる。民族間での土地の奪い合いから、戦争やジェノサイド（虐殺）も起こる。

また、江戸幕府は儒教（孔孟思想）なかに朱子学を官学としたが、武士と儒教ほどミスマッチな組み合わせはない。朱子学では武力によって政権をとることは霸道であり、儒教の正統な統治原理（王道）ではないから。そして朱子学では分離して「忠孝一如」の原則をつくらなければならない。この感覚、この思い切りを、日本人がどこまで共有しているだろうか。この感覚のギャップが、国際社会に生きる日本の問題点になる日が来るかもしれない。

また、江戸幕府は儒教（孔孟思想）なかに朱子学を官学としたが、武士と儒教ほどミスマッチな組み合わせはない。朱子学では武力によって政権をとることは霸道であり、儒教の正統な統治原理（王道）ではないから。そして朱子学では分離して「忠孝一如」の原則をつくらなければならない。この感覚、この思い切りを、日本人がどこまで共有しているだろうか。この感覚のギャップが、国際社会に生きる日本の問題点になる日が来るかもしれない。

族紛争を抑止する——これが宗教の目的だったのだ。翻って、日本には大きくて大きな川がなく、小麦栽培ではなく稲作だったから、大規模灌漑農業はできない。手間のかかる共同作業を行なうため、宗教がなくても平和的に仲良くできた。逆に、宗教があるとかえって仲良くできないと思ってしまう。

6世紀前半に仏教が伝来したと言われるが、日本人には難しすぎて理解できなかった。もともと抽象思考で内容が難しいうえに、中国人が中国語に訳したものを中国語のまま読んでいたのだから、よくわからないもの仕方がない。そのため、念仏（南無阿弥陀仏）と仏の名を唱える、題目（南無妙法蓮華経）と経典の題目を唱える、座禅の三つが最も流通することになった。共通するのはお経を読まないこと、これでは実は仏教とはいえない。

また、江戸幕府は儒教（孔孟思想）なかに朱子学を官学としたが、武士と儒教ほどミスマッチな組み合わせはない。朱子学では武力によって政権をとることは霸道であり、儒教の正統な統治原理（王道）ではないから。そして朱子学では分離して「忠孝一如」の原則をつくらなければならない。この感覚、この思い切りを、日本人がどこまで共有しているだろうか。この感覚のギャップが、国際社会に生きる日本の問題点になる日が来るかもしれない。

皇室 ■ 内親王誕生の今だからこそあえて問う

# 日本人のアイデンティティを体現してきた 天皇制が直面する「構造的見直し」

世界のロイヤルファミリーは今後どこへ向かうのか。

アフガニスタンの暫定政権では元国王がある存在感を示したが、近年オーストラリアではイギリス国王をいまだに立憲君主制から共和制への移行論議が起きている。さらに日本では天皇家で女子が誕生するたびに世継ぎ問題が取りざたされる。21世紀に入った今、国の統治機構として王室や日本の皇室はどうあるべきか、橋爪大三郎・東京工業大学教授（社会学）に聞いた。

王とは何か。

社会が未発達な段階で、人間は大家族を基礎にして生きていた。大きな集団をつくるほうがより安全であり、一番信頼できるのは血縁関係である。この血縁集団、大家族のネットワークを政治的・経済的に運営していくために生まれたリーダーが、首長や族長、酋長などと呼ばれるもので、日本では家族と呼んでいる。

族長や首長をもっと大きく東ねた同盟をつくらうとすると、その上のリーダーが必要となる。最初にリーダーが生まれるときは族長の間で相当にもめただろうが、いったん政治的権威が出来上がると、統治権を子の代になつていく。さらに日本では天皇家が女子が誕生するたびに世継ぎ問題が取りざたされる。21世紀に入った今、国の統治機構として王室や日本の皇室はどうあるべきか、橋爪大三郎・東京工業大学教授（社会学）に聞いた。

気が治る「ロイヤル・タッチ」の例は世界の各地で見られる。また、王の健康状態が自然や社会現象に影響するなど、ある種の神秘性が認められるのが、原始的な王の特徴だという指摘もある。19世紀の人類学者フレザーが、17、18世紀の世界中の冒険商人や宣教師たちの日記や手紙を研究してまとめた『金枝編』（東京書籍）には、世界中のあらゆるタイプの



「この世をば、わが世とそ思ふ」と栄華を極めた藤原道長も天皇家を必要とした。

## 橋爪大三郎

東京工業大学教授

HASHIZUME Daisaburo

A. OGASAWARA



ヨロッパには今日も多くの王家が存在しているが、もとをたどればみな族長だった。森林

う状態が生じたりするわけだ。王室の身近な存在感がよくわかるグリム童話

ヨロッパには今日も多くの王家が存在しているが、もとをたどればみな族長だった。森林

ヨロッパには今日も多くの王家が存在しているが、もとをたどればみな族長だった。森林

ヨロッパには今日も多くの王家が存在しているが、もとをたどればみな族長だった。森林

ヨロッパには今日も多くの王家が存在しているが、もとをたどればみな族長だった。森林

地帯にいたゲルマン民族が、ローマの文化やキリスト教に触れて社会をしいだいで発達させ、定住、定着が進む。地域を支配する者が現われて族長となり、王となつていった。 辺境の地域に行つて統治権や裁判権を宣言して称号を得る者もいる。それを上に認めさせたのが貴族である。王や貴族は土地を支配するから、当然、相続の問題が起る。当時の戦争の多くは土地の相続をめぐるもので、王家が入れ替わることもしばしば起きた。 また、王は外国の王家が大貴族と結婚することが多かったため、ヨロッパの王家はほとんどが親戚同士となった。例えばイギリスではフランス人の王家

【PROFILE】1948年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学大学院社会学研究科価値システム専攻教授。著書に「言語ゲームと社会学論」「はじめての構造主義」、共著に「天皇の戦争責任」など。



皇太子と皇女誕生で皇室典範改正、女性天皇（女帝）論も議論されたが…。(雑誌協会代表取材)

やドイツ人の血の濃い王家による支配が長く続くことも珍しくはなかった。 こうした事情から、王位継承をめぐる戦争が繰り返されたのが、ヨーロッパの中世から近世にかけての歴史である。ジャンヌ・ダルクが登場するのは、1415世紀の百年戦争と呼ばれる英仏間の戦争の一時期だが、これはフランス国王の継承権を主張するイングランド国王がフランス領に攻め込んで起きた戦争だった。 16世紀に入ると、イギリス、スペイン、フランス、オーストリア、ロシアなどは、絶対主義と呼ばれる強力な王権国家を建設した（絶対王制）。 貴族がそれぞれの土地を支配する封建社会から、王家と貴族が明確に分離し、王が代表する国家というものが初めて誕生したのである。

主権者がある領域を絶対的に支配することは、実は近代化のための必要条件である。小さな王が分立した状態で、それぞれが好き勝手に領土をめぐらしたり関税をとったりしたので、商業も経済も発展しない。一国規模の大きなマーケットを成立させ、産業を起すには、政治的勢力を一元化し、国家を形成するほうが都合がいいからだ。 遅れていたのはドイツで、領邦国家と、小さい王や諸侯が分立する状態が長く続いた。例えばグリム童話を読むと、

旅人がちよつと歩いていくとすぐにお城があつて王様がいる。支配しているのは小さな領域だから、たいした政治力もなく、民衆が気やすく声をかけたりしていた。こうした身近な存在感が、ヨーロッパにおける王室に対する敬愛心の基本になつていようように思う。 プロイセンが拡大し、大ドイツを形成するのは、19世紀になつてからである。しかし国家に統一しそこねて残った地域は現在もヨーロッパに点在する。モナコやルクセンブルク、リヒテンシュタインなどとして残っている国はその例だ。 一方、現在の中東の王家は、ヨーロッパとはまったく異なる経緯で成立した。中東は長い間オスマントルコが支配していたが、イギリスやフランスが長く続く族長の家柄の人間を捜し出し、オスマントルコに反抗するよう仕向けた。そしてオスマントルコが第1次世界大戦で敗れ滅亡すると、イギリスやフランスは、王として独立させる代わりに石油の採掘権を認めさせるという取引をした。その後、政治体制の変つた国もあるが、そのまま現在に至っている王国も多い。 国によって事情は異なるが、王制にはある種の安全装置としての機能が備わっている。アフガニスタンではザヒル・シャール

世界の王室のなかでも、天皇家は類例のない存在である。日本では、家族という部族制が存在した時期はあつたが、かなり早い時期に対抗勢力がなくなり、5世紀頃までには全体的な統治権を持つ天皇（天皇の称号自体は6世紀末から）が誕生した。理由はわからないが、以来、天皇の統治権を否定するような勢力が現われず、一度も別の政治形態が日本列島に樹立されることはなかった。 例えば藤原氏が「天皇なんかいらぬ」といって独立し、藤原王朝をつくれればヨーロッパ的だが、そうはせずに天皇家と血縁を結んで権力を拡大しようとした。つまり天皇は「血縁カリスマ」であり続けたのである。 平安時代の貴族はもととは家族で、8世紀ごろに律令制が整えられると、官位を与えられ

る代わりに土地は国家のものとなり、国司として各地に赴任させられた。悔しいから、彼らは税金をネコババし、莊園をつつて私有地化をはかった。

続いて台頭した武士は、貴族の土地を奪って領地支配し、統治権と裁判権を持つようになつた。土地を媒介して主君と主従の関係を結び、一恩と奉公で軍団をつつて戦う。ヨーロッパの貴族と同じである。

だが、武士がヨーロッパの貴族と違うのは、初めから天皇に対する服従を原則としている点だ。日本人はみな神から生まれたことになっていて、日本の地域集団、血縁集団、職能集団、軍事集団にはそれぞれ神がついている。天皇はその神の直系の子孫だから、誰も天皇に対しては戦わないのだ。

### これは国民一人一人のメンタリティーの問題だ

敗戦後、日本の象徴となった天皇家にとって、最大の難題は婚姻である。イギリスのダイアナ元皇太子妃のように貴族の家柄から妃を選べばいいが、日本には貴族はいない。日本国憲法には結婚(婚姻)は「両性の合意のみに基づく」(第24条)と書かれているから、宮内庁が白羽の矢を立てたからといって結婚が決まるわけではない。これまでは幸いにして、

美智子皇后や雅子皇太子妃のような素晴らしい方が、戦後日本社会を成り立たせる重大な任務であることを自覚して、天皇家に嫁がれた。だが、今後どうなるという保証はどこにもない。これは今の天皇制の構造的欠陥だ。



天皇は戦前、戦後の日本の地承性を体現している。

この欠陥を解消するには、いくつかの方策が考えられる。一つは、北欧諸国のように「開か

れた王室」として、限りなく普通の人になつてもらうというやり方。しかし、そうすると王室の神秘性が失われて、象徴であることが難しくなる。

結婚相手をつくるために貴族制を復活する方法もあるが、戦後民主主義とぶつかってしまう。そこでにわかに言われ始めたのが、皇室典範を改正し女性にも皇位継承権を与える「女帝論」

だ。男の子が生まれなかったときの解決策として考えられているわけだが、誰がその夫となるのかという、同じようなもつと厳しい問題が起こる。

究極の解決策は、天皇制を廃止して、共和制になることだ。今や皇室は、ほとんど国民に対するポランテア活動である。多大な犠牲を顧みずに、生涯を通じて国民に対するサービス

している。憲法には国民統合の象徴と書かれているが、もう一つの大きな役割は、現行憲法への改正の発議者であることだ。旧憲法の主権者が新憲法の象徴におさまっている。このことで、結果的に昭和天皇は、戦前戦後を通じて日本人のアイデンティティを体現する存在となつた。

しかし、戦後半世紀以上たつた今、その役割もほぼ終わったのではない。国民はロイヤルファミリーを十分認めているが、構造的な欠陥があるから見直しの議論をする。従来の反天皇的皇室廃止論とは違う考え方が出てきてもいい時期だと思ふのだ。

日本人は、政治権力者に弱い一方で、政治権力者を嫌悪している。これまでは政治的権力者と距離をとるために「権威はあるが実権はない」という人間を必要としてきた。しかし、これは民主主義以前の心性である。民主主義は、国家と絶対的な権力が必要で、それを自分たちで運営しようという自覚と覚悟によって成り立つものだ。つまり、国民一人一人のメンタリティーの問題なのである。

### ひとり天皇家に不自由を強いる無責任

共和制の原点は、古代ギリシア、ローマにまで遡る。ギリシアでは市民の共同統治によって国が運営されていたが、マケドニ

アに占領されて王制となり、ローマは領土を拡大しすぎたために、將軍が強い政治力を持つようになつてシーザーが現われた。共和制の問題は、独裁になりやすいという点である。例えばロシアの王室が倒れてソビエトが成立すると、スターリンが出てきて大粛清を行ない、ドイツでも共和国のもとでヒトラーが登場した。

世界で最初に近代民主主義を確立したのはアメリカで、政治力でヨーロッパの王制に対抗するために大統領制をとった。そして大統領が独裁者にならないように、選挙で選び、任期をつけ、さらに元老院(上院)でチェックするシステムになっている。フランス革命でもこれを真似しようとしたが、恐怖政治が横行し、やがてナポレオンが出てきて皇帝を名乗るようになった。つまり、シーザーになつてしまつたわけだ。

共和制は非常に難しい歴史を経てきたものである。

だが、ひとり天皇家に不自由を強いて、自分たちはこのままでいいという国民の態度は、虫がよすぎるし無責任である。そもそも象徴天皇をいだいた民主主義は、偽りの民主主義にすぎない。共和制への移行は、日本人の民主主義が試されることであり、同時に敗戦後の真の独立を意味するものなのである。

2001年(平成13年)10月25日 木曜日 41521号 (日刊)

# 世界がわかる 宗教社会学入門

緊急大増刊 読者の声

「アツターの神」も「エホバの神」も「ソッド・プレス・アメリカ」の「ソッド」も同じ神だ！ 天国は死後の世界じゃない キリストもイスラム教では預言者として敬われている...日本人が知らない世界の宗教の常識を満載

橋爪大三郎 東京工業大学教授

高校生にもわかる 講義にしました

戦争も辞さない宗教とはなんなのか？ ニュースをもっと深く理解できる、初の宗教ガイド！

(651)0053 FAX048(666)4648 \*表示は本体価格 消費税別追加算 PR誌 ちくま 11月号 年間購読料1000円 \*見本誌呈 お申し込みは左記小社サービスセンター宛 他

2001-15

# 橋爪 Interview

## 大 三 郎

オカルトの宗教社会学  
取材文／佐々木英輔

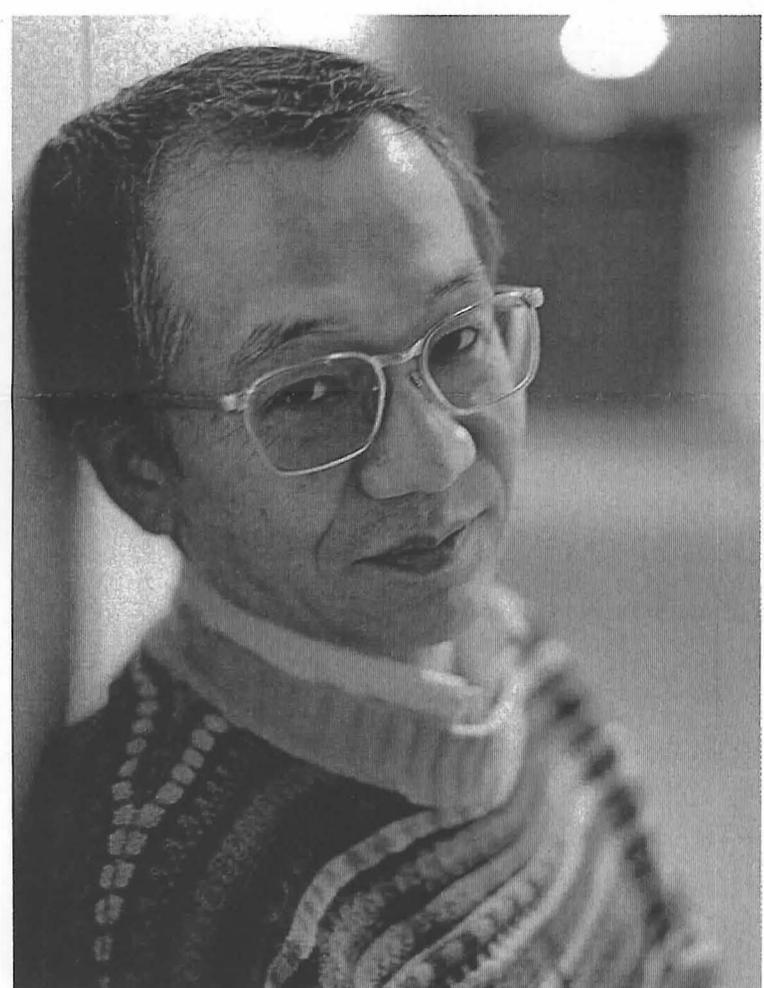
### そもそもオカルトって何だろって？

オカルト、何というわかりにくい言葉なのか。まず①定義が曖昧にすぎない。オカルトの辞書的な意味は「隠されているもの」である。しかしこの定義ではそもそも何がどのようにして、何のために、誰から「隠されている」のか、まったく説明されていない。②内容が検証も反証もできない。これは①から必然的に導かれる結果だ。すなわち、「隠されている」からこそオカルトであるならば、科学その他の方法で「隠されているもの」が明らかになったならば、もはやそれはオカルトではない、となる。すなわちオカルトがオカルトである以上、これ以上説明をしませんということを説明しているにすぎない。こんなものってありだろって？  
こんなのは嫌だ。議論検討を拒絶するような定義は不完全だ。そう思っ、宗教関連に屈指の強さを誇る社会学者、橋爪大三郎東工大教授に説明をお願いした。

### 宗教ならオカルトではなく、オカルトなら宗教ではない

「まず一般論で言うと、オカルトを単独の概念として捉えようとするのは止めたほうがいいでしょう。かえってわからなくなる。例えばキリスト教の場合で考えてみましょう。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの啓典宗教は、いずれも聖典・教義・信仰を明確な形で持っている。これを光の当たる表通りと思ってください。しかし光が当たらない所があれば、必然的に裏口や屋根裏といった所に影がでるでしょう。これがオカルトなんです。つまり光を前提とした対概念と考えると、初めて影がでるのと同じ。」

もちろん光は影を駆逐してあまねく世界を照らしだそうとします。だから厳格な啓典宗教であるユダヤ教、キリスト教はオカルト禁止、イスラム教もほぼ禁止ですね。実はこの根本のところは日本にはわかりにくいんです。その理由は、おおいお述べますが……」  
それならイエス・キリストの行なつた数々の奇跡はどうなるのか。病人を治したり、空中からパンを取り出したり。あれはオカルトでは？  
「いえいえ。イエス・キリストは神そのもの。そもそもこの世の物理法則は神の定められたことなのです。神はこの世界を隅から隅まで合理的に作られた。ところが神たるイエスだけは物理法則を自由に変更できる。なぜなら神ご自身が定められた法なのだから。でもそれゆえ



はしづめ・だいさぶろう ● 1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。専門は社会学。主な著書に『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』（ともに勁草書房）、『はじめての構造主義』（講談社現代新書）、『性愛論』（岩波書店）他多数。昨年6月に発行された『世界がわかる宗教社会学入門』（筑摩書房）は、初学者向けに平易かつツボを心得た解説でベストセラー本となっている。

に神の許しなく奇蹟を行なうことはできません。もしそれに類することを行なう者がいたならば、それは贖キリストです。そのような贖物は当然許されません」  
しかしその割に西欧社会には魔術や魔女、錬金術や星占いといったオカルトが多くみられる。  
「ああ、あれはね、本来のキリスト教とは関係ないんです。ローマ帝国から周辺へ布教を進めていくプロセスで異教の要素が混入したんですよ。たとえばゲルマン民族。彼らは日本人と同じような多神教を信仰していました。いくらキリスト教に改宗しても長年持っていた信仰はそう簡単に捨てられない。そうしたものは姿を変えて取り込まれたんです。縦の木とキリスト教なんて何の関係もないわけで、あれもそういう混入した異教文化のひとつです。皆当たり前のように

やっていますが、ともかくここで大事なことはね、宗教を理解しなければオカルトはわからないけれど、それと同時に、宗教ならばすなわちそれはオカルトではなく、オカルトならばそれは宗教ではないこと、これをしっかり頭に刻みつけておくことなんです」  
**アジアの宗教におけるオカルトの身分と役割**  
キリスト教などの啓典宗教以外にも宗教はいろいろある。例えば中国の道教や、仏教の中でも密教などは、オカルトとの区別がつかないように思う。  
「中国の場合を考えてみましょう。あの国の光は言うまでもなく儒教です。儒教の本質は政治学、しかも統治する側の視点に立った政治学です。だから役人採用試験

である科挙においては儒教の膨大な知識が問われるわけです。もちろん科挙に合格すれば、名譽も富も思いのまま。ところがそれは容易ではない。大多数の者は負け組なわけですよ。そして儒教は統治の学、君子の教えだから、負け組には見向きもありません。そこで負け組の個人的苦悩に比べ、彼らに敗者復活の場を与えるものが必要になる。それが中国におけるオカルト、すなわち道教なんです。もう出世はアウトですから、山にこもって仙人になって不老長寿を実現し、あくせく働く俗人どもを嘲笑するわけですね。  
中国が特異なのは、光たる儒教に対して、影〴〵オカルトが堂々と道教という看板を掲げて社会にしかるべき領域を確保していることです。この辺りは中国人の現実感覚に富んだところですよ。キリスト教のようにオカルトの撲滅に血眼になったりしません。清の時代に書かれた『聊齋志異』なんて物語を読むと、科挙に備えて試験勉強中の若者が美人に誘われてふらふらついてゆく、するとそれが魔物だった、なんて話がやたら多い。まさにこの辺りが儒教と道教の境界線なわけだし、それぞれがそれぞれを必要とした理由でもあるんですよ。  
一方仏教の場合は、キリスト教とも道教ともちがうんです。仏教は原因と結果の根本法則たる法〴〵ダルマを悟ることがすべて。お釈迦様のような厳しい修行をすれば、誰でもダルマを悟ることができ、可能性はある。あくまで可能性ですが……。ともかくダルマを悟れば、因果法則の秘密がわかる。因果法則の秘密がわかれば、他人の心を見透したり、瞬時に遠い所に

移動できたりする、これを神通力  
という。ただし、これはイエスのよう  
に法則の外に在るのではないこと、  
それが重要だ。あくまで法則の  
秘密を悟ってそれを内側から  
使う。それを悟ってない者の目から  
見ると不思議に見える、それだけ  
のことなんです。つまり仏教におい  
ては、影〓オカルトが、正当な教  
え〓光の一部に含まれているん  
ですよ。

ちなみに密教は仏教と同じく  
全てオカルトのように見えますが、  
あれはお釈迦様が後になって語っ  
た教えほど難しい上級者向きとい  
うことになっていて、その観点から  
理解すべき。密教、例えばオウム  
真理教で有名になった金剛乘(ヴ  
ァジラヤーナ)などは、小乗や大乘  
に比べて、もうほとんど悟りかけ  
ちやうた人向きの教えなんです。初  
級者や中級者にいきなり高度な  
ことを教えるとかえって混乱させ  
ちやうだけだから秘密の教え、す  
なわち密教なんです。

### 影の国、 オカルトの国、日本が オカルト化する理由

そうなる日本の場合はどう  
なのか。やはり仏教が中心だから、  
光の内に影が含まれる形なのだろ  
うか。

「日本の場合、儒教にせよ道教に  
せよ仏教にせよ、そして言うまで  
もなく西欧科学にせよ、ともかく  
光たるものはすべて外国文化なん  
です。外国文化〓光。そうするとど  
うなるか、日本固有の文化こそが  
影ということになっちゃうじゃない  
ですか。では日本固有の文化とは  
何か。本居宣長にせよ三島由紀夫  
にせよ、それを徹底的に探してみ

たんです。探して探して探しぬいた  
挙げ句、結局、天皇と〓ものあは  
れ〓みたいなフリーリング的なもの  
と、死の穢れを恐れる感情を中心  
にした多神教みたいなもの、これ  
ぐらいしかなかったんです。つまり  
光に満ち溢れた、すなわち外国文  
化に満ち溢れた日常において、ふ  
と思いつくもの、思いつくものとす  
るもの、それが日本固有の文化で  
あり、なおかつそのすべてがオカル  
トなんです。

だから日本人は、宗教とオカル  
トの区別がつかえません。なぜなら  
日本に輸入された宗教には、葬式  
仏教と化した姿に見るように、日  
本固有の文化〓影〓オカルトが混  
ざり込んでいくから。そこで宗教は  
怖い、となっちゃうんです。また三島  
以降の日本の流行作家の作品、た  
とえば村上春樹の『ねじまき鳥ク  
ロニクル』や吉本ばななの『アムリタ』  
等に、しばしば〓忘れかけたこと  
を必死で思い出さす〓という要素と〓死  
者との交流〓という要素が顔を出  
すのもそこら来ると思う。オウム  
真理教にしたって、1980年代の  
ピカピカ輝く世の中にたいする影  
からのリアクションとして捉えない  
と何だかわからないでしょう。

日本人は外国との接触が増え  
るたびに、一種の防御反応を起こ  
します。近くは64年の海外渡航自  
由化以来、たびたび日本ブームや  
オカルトブームが起きて今に続い  
ているでしょう。まあ誰もがイチロ  
ーのように国際的に活躍できるわ  
けじゃないから当然と言えは当然  
ですね。外国でうまくいかない、や  
っぱり日本が一番だ、ところでそ  
の日本は何? その答えは〓影の  
国、オカルトの国〓なわけです。そ  
れが、アニメやサブカルチャー  
の恰好の話題となっている。」

13. 2. 16  
神戸新聞

東京工業大学大学院  
橋爪大三郎教授



### 共生の技術つくろう

コミ懸

明石コミュニティ懇話  
会(事務局・神戸新聞明石  
総局)の二月例会が十五日、  
明石市松の内二のホテルキ  
ャッスルプラザで開かれ、  
東京工業大学大学院社会理  
工学研究科教授の橋爪大三  
郎氏が「二十一世紀を生き  
る」をテーマに講演した。〓

橋爪氏は一九四八年、神  
奈川県生まれ。七二年、東  
京大学文学部卒。同大大学  
院社会学研究科博士課程修  
了後、東京工科大学助教授  
を経て、九六年から現職。  
九九年から約一年、ハーバ  
ード大学ライシャワー日本  
研究所の客員研究員。主な  
著書に「はじめての構造主  
義」など。講演要旨は次の  
通り。

二十世紀は、前半が戦争  
の時代、後半が戦争のない  
時代と分けられる。しかし  
日本は、一貫して総力戦体  
制だったといえる。

前半に軍部の暴走を許し  
た日本は、過剰に総力戦に  
適応し、二十世紀最大の悲  
劇を味わった。また後半か  
ら現在までは、経済発展に  
総力を注ぎ、特に安全保  
全保障の面でアメリカに依  
存している自覚が足りな  
い。すでにアメリカの関心  
は中国に移り、経済的な拠  
点もアジアへ移りつつあ  
る。

二十一世紀は、情報、生  
命、エネルギーなどの科学  
技術▽経済、安保などへの  
アジアの台頭▽人口、資源  
による地球環境の危機など  
の時代になるだろう。  
日本の二十一世紀は、國  
会の立法府としての機能を

強化することに始まり、対  
米関係など安保の再構築▽  
高齢化、地方分権を視野に  
入れた経済発展戦略▽国際  
社会との良好な関係確保▽  
地球環境への配慮▽歴史や  
文化、教育に重点を置いた  
大胆な国内改革が課題にな  
るだろう。  
すべての人が知恵を出し  
合い共に生きていく技術を  
生み出すことが、二十一世  
紀において大切だといえ  
る。

宗教はコワイ、アブナイと思っているだけでは、世界で起きていることを理解できない!

橋爪大三郎

Hashizume Daisaburo AN INTRODUCTION TO SOCIOLOGY OF RELIGION

# 世界がわかる宗教社会学入門

戦争もいとわぬ宗教とはなんなのか? 海外へ行く前に必ず読んでほしい、初めての「宗教ガイド」。定価(本体価格1800円+税)

筑摩書房

サービスセンター 〒331-8507 さいたま市榑町2-604 TEL048(651)0053 FAX048(666)4648  
筑摩書房ホームページ <http://www.chikumashobo.co.jp/>